



2015 年度
アンコール遺跡整備公団
インターンシップ報告書

金 沢 大 学

アンコール遺跡整備公団インターンシップ実施委員会

2016 年 2 月





写真 1. 業務の最終日にアンコール遺跡整備公団水管理部門前にて（後列左から、神谷卓磨、牧田啓成、磯部朝日、野村結、河本麻実、長谷川美華、瀬戸利之、若宮野乃花、前列左から、辻野成瑠、中山雪枝、盛田佳歩、加納望音）。

写真 2. 業務初日の担当職員との顔合わせ。各グループの担当業務がここで決まる。

写真 3. 各グループの担当職員から業務内容などについての説明を受ける（グループ 2）。

写真 4. 業務終了後には担当職員の指導を受けながら報告書を英語でまとめる（グループ 4）。



3

4



写真 1. 現場へは職員が運転するバイクで移動する。
 写真 2. 洪水対策用運河の水門の検査（グループ 3）。
 写真 3. 西バライ西側堤防の植林（全グループ）。
 写真 4. 民族センターでの野外授業（全グループ）。
 写真 5. 北スラスラン村の家屋の視察（全グループ）。
 写真 6. アンコール・ワット寺院で担当職員の説明を受ける（全グループ）。
 写真 7. 古代集落ロヴィアの視察（グループ 1）。



写真1, 2. 休日に訪れたバンテアイスレイ寺院（写真1）とトンレサップ湖（写真2）.

写真3, 4. 業務後に訪れたプレループ寺院（写真3）とスピエントモー遺跡（写真4）.

写真5. 公団食堂での職員たちとのランチ.

写真6. 昨年度のインターンシップで植えた5周年記念植樹の成長（チューター）.

写真7. 受入責任者のハン・プウ副総裁によるインターンシップ最終日のグループ面談と成績判定.



写真1～5. お世話になった公団職員のみなさんとのお別れバーベキューパーティ。ルン・タ・エクチーム（グループ1：写真1），西バライチーム（グループ2：写真2），北バライチーム（グループ3：写真3），洪水対策チーム（グループ4：写真4），そして全員での記念写真（写真5）。



写真1. 埼玉大学と滋賀県立大学の海外野外実習メンバー。アンコールワット北聖地前にて（左から、堂満華子、浅井裕里、大崎亜見、山内悠、山崎郁実、山村瑞穂、高井恵）。

写真2. コンンプルック村の水上住宅群の見学。

写真3. 東北大学の吉野先生とともにコンンプルック村を見学。

写真4. トンレサップ湖沖の水上レストランでのニシキヘビとの記念写真。





インターンシップでの業務地（グループ1：ルン・タ・エク，グループ2：西バライ，グループ3：北バライ，グループ4：洪水対策事業）

2015 年度アンコール遺跡整備公団インターンシップ報告書

目 次

| | | | |
|--|----------------|-----|----|
| 1. はじめに | 加藤和夫 | ・・・ | 1 |
| 2. 2015 年度インターンシップの成果と今後の課題 | 塚脇真二・Hang P. … | | 2 |
| 3. 小松短期大学からの学生派遣について | 木村 誠 | ・・・ | 7 |
| 4. インターンシップ参加学生の報告 | | | |
| 1) アンコールインターンシップに参加して | 瀬戸利之 | ・・・ | 11 |
| 2) 一生にできるかできないかの体験 in カンボジア | 加納望音 | ・・・ | 15 |
| 3) 微笑みの国、カンボジアにて | 野村 結 | ・・・ | 19 |
| 4) 初めての途上国 | 盛田佳歩 | ・・・ | 22 |
| 5) オークン・チュラン！ | 若宮野乃花 | ・・・ | 25 |
| 6) アンコールインターンシップを終えて | 中山雪枝 | ・・・ | 29 |
| 7) カンボジアでの経験 | 辻野成瑠 | ・・・ | 33 |
| 8) 海外インターンでの自己変化 | 磯部朝日 | ・・・ | 36 |
| 9) シェムリアップの洪水対策業務を経験して | 牧田啓成 | ・・・ | 42 |
| 10) カンボジアでの 2 週間を通して | 神谷卓磨 | ・・・ | 46 |
| 5. チューターの報告 | | | |
| 1) チューターとしてのインターンシップ | 河本麻実 | ・・・ | 49 |
| 2) チューター視点でのカンボジア | 長谷川美華 | ・・・ | 53 |
| 6. 埼玉大学の海外フィールド実習報告 | | | |
| 1) 埼玉大学の海外フィールド実習 | 荒木祐二 | ・・・ | 57 |
| 2) 海外フィールド実習から学んだこと | 山村瑞穂 | ・・・ | 59 |
| 3) カンボジアでの体験を終えて | 山内 悠 | ・・・ | 61 |
| 4) カンボジア海外フィールド実習 | 山崎郁実 | ・・・ | 63 |
| 7. 滋賀県立大学の海外フィールド実習報告 | | | |
| 1) 海外インターンシップと海外フィールド実習を見て | 堂満華子 | ・・・ | 67 |
| 2) 学生生活最後の学び | 浅井裕里 | ・・・ | 69 |
| 3) カンボジアを訪問して | 大崎亜見 | ・・・ | 72 |
| 8. 寄 稿：シェムリアップの伝統住居の視察とアンコール遺跡 整備公団インターンシップ参加者との交流を通しての雑感 | 吉野 博 | ・・・ | 75 |
| 9. 資 料：2015 年度アンコール遺跡整備公団インターンシップの概要 | | ・・・ | 80 |

- 図版 1 : インターンシップの参加学生たち
- 図版 2 : インターンシップでの現場業務など (1)
- 図版 3 : インターンシップでの現場業務など (2)
- 図版 4 : インターンシップ最終日のバーベキューパーティ
- 図版 5 : 埼玉大学と滋賀県立大学の海外フィールド実習
- 図版 6 : アンコール遺跡世界遺産公園での各グループの業務地

1. はじめに

金沢大学人間社会学域国際学類長 加藤和夫

平成 22 年度から毎年実施されている「金沢大学／アンコール遺跡整備公団インターンシップ」が、今年度も 8 月 22 日から 9 月 5 日までの 14 日間のスケジュールで実施されました。今回で 6 回目となるこの海外インターンシッププログラムには 8 名の学生＋チューター 2 名の 10 名が参加しました。チューターも含めた 10 名の内訳は、人間社会学域が国際学類 6 名、経済学類 1 名、理工学域が環境デザイン学類 2 名、物質化学類 1 名、うち男子学生は昨年と同じ 2 名でした。

今年度も、当プログラムは昨年が続いて、在カンボジア日本国大使館による日カンボジア絆増進事業として認定されました。カンボジアでは唯一とも言える学生のインターンシップとして、学生と公団職員との双方向の交流という点が高く評価されていることの証しと言えましょう。また、今回初めて小松短期大学の 1 年生 2 名が参加し、当プログラムでの他大学との連携も実現しました。

一昨年度から、環日本海域環境研究センターと国際学類との共催として新たなスタートを切った当プログラムは、これまで同様、環日本海域環境研究センターの塚脇真二教授の献身的なご尽力によって事故もなく、順調に実施することができました。塚脇教授には、今回も PR 活動や公団との折衝を含む諸準備、参加学生の選考と情報交換会の開催、緊急連絡網の作成や学内のさまざまな組織との交渉、カンボジア国内諸機関との連絡など、諸事万般にわたってお世話になり、インターンシップ中も、現地で学生のサポートに細心の注意を払っていただくとともに、毎日多くの写真とともに詳細なレポートをメールで頂戴しました。共催学類の長として深く感謝申し上げる次第です。また、昨年の同プログラム経験者でチューターとして同行してくれた国際学類 4 年生の長谷川美華さん、環境デザイン学類 4 年の河本麻美さんにも感謝します。お二人の経験と配慮が参加学生にとって大きな支えとなったはずです。そして、今回も快く本学学生を受け入れてくださり、優しく指導いただいたアンコール遺跡整備公団職員の皆様にも心より感謝申し上げたいと思います。

10 月 21 日に開催された報告会での参加学生たちのレポートを聞きながら、このプログラムが、数少ない人の暮らす世界遺産での海外インターンシップとして極めて貴重な体験となっていることが確信できました。昨年度、文部科学省の「スーパーグローバル大学創成支援事業」に採択され、本学はより一層のグローバル化への努力が期待されています。当プログラムは、今年度幸い金沢大学教育改革 GP として採択され、今後 5 年間は大学の補助金を得て実施できることとなりました。当プログラムが、今後ますます本学のグローバル化推進の一翼を担うものとして成長し続けることを願って、ご挨拶といたします。

2. 2015 年度インターンシップの成果と今後の課題

環日本海域環境研究センター・教授 塚脇真二
アンコール遺跡整備公団・副総裁 Hang Peou

今年度で 6 回目となるカンボジアのアンコール遺跡整備公団（略称：アプサラ公団）での海外学生インターンシップは、金沢大学の 8 名に加えて小松短期大学から 2 名の学生を迎えての実施となった。また、このインターンシップの期間に合わせて埼玉大学と滋賀県立大学の海外フィールド実習が実施されたため、これにチューターの 2 名を加えての学生総数が 18 名、これを引率する教員 4 名という大所帯となった。このような大人数にもかかわらず、アプサラ公団職員たちの手厚い指導と保護のもと、学生たちの積極的ながらも節度ある行動もあってすべての予定を無事に終えることができた。同公団 Bun Narith 前総裁、Sum Map 新総裁、ならびに同公団関係諸氏に心からの謝意を表したい。また、金沢大学国際学類加藤和夫学類長，同環日本海域環境研究センター早川和一センター長，同学生部学務課教務係辻谷友紀主任，小松短期大学長野勇学長，同庶務課西田友紀主事補，ほか関係諸氏にはさまざまな支援をたまわった。金沢大学からは平成 27 年度教育改革 GP 事業としての経済的支援をいただいた。東北大学の吉野先生にはカンボジア伝統住居の視察とあわせてインターンシップをご視察いただき本報告書にもご寄稿いただいた。また、在カンボジア日本国大使館にはこのインターンシッププログラムを平成 27 年度日カ絆増進事業に認定いただいた。これらの関係諸氏にも深い感謝の意を表したい。

金沢大学からの参加学生は、国際学類 2 年生 3 名，同 3 年生 1 名，同 4 年生 1 名，経済学類 2 年生 1 名，そして物質化学類と環境デザイン学類の 3 年生各 1 名の計 8 名であり，小松短期大学からは地域創造学科 ICT&ビジネスステージの 1 年生 2 名が参加している（写真 1）。女子 6 名，男子 4 名の学生たちは，2～3 名ずつの 4 グループに分かれ 2 週間をとおして公団の業務に従事した。今年度の参加学生たちも，現地での協調性や積極性，社交性などのすべてにわたって申し分のない学生たちだった。なお，金沢大学からの参加学生のうちの 7 名は日本学生支援機構の平成 27 年度海外留学支援制度の助成金 7 万円を受け取っている。これによって学生たちの経済的負担を約半分に減らすことができた。このインターンシップの企画・調整から参加学生の募集や選別，実施，そして実施後にいたるまでの日程などは巻末の資料を参考されたい。



写真 1. 業務初日の担当職員との顔合わせ

昨年度のインターンシップに参加した国際学類 4 年の長谷川美華と環境デザイン学類 4

年の河本麻実が今年度はチューターとして参加学生たちに同行した（写真 2）。現地での生活や公団での業務にかかる参加学生たちの相談相手、学生たちと公団職員との間に入っての連絡や時間調整、学生たちの安全管理の補助と多岐にわたるチューター業務であったが彼女らはこれらを的確にこなしてくれた。小松短期大学からは引率教員として木村誠准教授が同短期大学の学生たちに同行している。また、海外



写真 2. チューターの長谷川美華と河本麻実

外フィールド実習を行った 2 大学では、埼玉大学教育学部の荒木祐二准教授が特別参加の学生 1 名を含む学部学生 4 名を、滋賀県立大学環境科学部の堂満華子准教授が学部学生 2 名をそれぞれ引率して現地を訪れている。

今年度のインターンシップでもっとも注目されることは、上述のとおり、インターンシップとしての 2 大学の学生 10 名とチューター 2 名、海外フィールド実習としての 2 大学の学生 6 名という、総勢 18 名もの学生たちが同時期にアンコール世界遺産で活動したことである。これらの学生たちが所属する学類や学部はさまざまであり、また、学年も 1 年生から 4 年生までと全学年にわたっていた。そのため、大学間の交流はもちろんのこと、専門分野や学年の垣根を超えての学生たちの交流にはよい相乗効果や波及効果を見ることができた。学生たち個々の専門分野に立脚する多様な興味が他の学生の関心を呼び、それが連鎖的に広がっていくという傾向を随所で見ることができた。

さらに、海外インターンシップと海外フィールド実習とでは活動内容が異なるとはいえ、4 つの大学での合同企画としてのこのプログラムの実施は、それぞれの活動の一部を重複させることで学生たちの安全管理体制をより堅固なものにすることになった。埼玉大学の荒木准教授はカンボジア情勢に習熟した若手研究者であり、小松短期大学の木村准教授と滋賀県立大学の堂満准教授はともにこれからが期待される若手研究者である。3 名もの若手研究者の参加によって、このプログラムを継続させようための明るい展望が開けてきたように感じる。



写真 3. 西バライでの植樹を終えて

インターンシップ業務の最終日には、学生たちの手による植樹が西バライ貯水池で実施された（写真 3）。その翌日には北バライ貯水池でバーベキューパーティを開催していただいた。いずれも参加学生たちにとっては忘れえない思い出になったことと思う。

このインターンシップの成果は例年と同様、以下の3点に集約される。学生たちへの「教育効果」、成果の「現地への還元」、そして本学の国際貢献にかかる「周知（宣伝）」である。これまでの報告書とほぼ同じ内容になるが以下に記述する。

(1) 学生たちが大きな満足と大きな経験とを確実に持ち帰ることができた（教育効果）。華やかに喧伝されるばかりの世界遺産であるが、その維持管理や観光客の便宜のためにどれほどの労力とその裏側で費やされているかを公団での業務をとおして参加学生たちは実体験することができた（写真4）。また、昨今のはやりの言葉である「持続可能」のために、さまざまな苦労がその背後あることを経験した。「最初のイメージとはおおきく違っていた」とは今年も学生の口からもれていた感想である。これとともに「貧しい発展途上国」というイメージが先行するカンボジアのくったくのない人々や豊かな自然に学生たちは日々触れることができたし、さらには国際協力の舞台であるとともに地域住民が暮らす世界遺産公園の特異性を目の当たりにもした。「国際貢献」と「地域社会」というふたつのキーワードを学生たちは実体験したことになる。学生たちの報告にはこの2週間の体験が生き生きとつづられている。したがって、このインターンシップでの2週間は学生たちにとってきわめて充実したものだったと客観的に評価されよう。これはこのインターンシップの実施が学生たちへもたらした大きな教育効果といえる。



写真4. アンコールワット寺院の警備職員と

(2) 学生たちを指導することによって公団職員に大きな教育効果をもたらした（現地への成果の還元）。参加学生たちはそれぞれの業務の担当職員たちとともに公団の通常業務に従事した。大人数となったため、学生たちの同行がこれまで以上に彼らの業務の支障になった点は否定できないが、インターンシップ終了後に公団上層部から、学生たちの存在が職員たちに大きな教育効果をもたらしたことを例年と同様に感謝の意とともに指摘された。具体的には、1) 学生たちを案内することで職員たちの「説明」の技術が向上したこと、2) 職員たちが説明する「楽しみ」や「喜び」を味わったこと、3) 業務についての全般的なことを学生たちに説明することで、職員たち自身が業務内容を総括することができたこと、である。

(3) 学生たちの活動がアンコール世界遺産公園で大きな話題となった（宣伝効果）。安全管理の観点から、インターンシップ参加学生たちはアプサラ公団の制服を着用して日常の業務に従事したが、カンボジアではエリート集団として知られる同公団の制服を日本人の学生たちが着用するのはきわめて目立つものであり、現地の人々や日本語観光ガイドたち、彼らが案内する日本人観光客におおいに注目された。参加学生たちが制服にアプサラ公団のロゴとともに金沢大学あるいは小松短期大学のロゴをつけて業務にのぞんだことも効果

的だった。したがって、このインターンシップは世界遺産における両大学ならびにわが国の国際的な貢献活動として一定の宣伝効果をあげたといえよう。

アプサラ公団での海外インターンシップを将来にわたって継続するための基礎と実績は十分に確立できている。このプログラムを継続させるための経済的基盤も金沢大学教育改革 GP 経費の受給によってようやく安定した。さらに、長期的に継続するための懸案のひとつであった他大学との連携についても、これまでの埼玉大学に加えての小松短期大学と滋賀県立大学の参加によってさらに大きく前進した。今後は、参加学生たちの多様な興味と専門分野に対応させるべく、アンコール世界遺産においてさまざまな業務を担当するアプサラ公団内外での派遣先の多様化につとめたい。

3. 小松短期大学からの学生派遣について

小松短期大学地域創造学科・准教授 木村 誠

金沢大学において 2010 年度に始まったカンボジアのアンコール遺跡整備公団での学生インターンシップに、今年度初めて小松短期大学から 2 名の学生を受け入れて頂いた。まずは本学学生の受け入れをご快諾頂き、かつ APSARA 公団をはじめとする関係各所との調整にご尽力を頂いた金沢大学教授塚脇真二氏、そして本学学生の参加に対してご理解と温かいご支援を頂いた金沢大学国際学類加藤和夫学類長ほか関係の皆様にご心からの謝意を表したい。

今年度で創立 28 周年を迎える小松短期大学は、幅広い教養と豊かな人間性の涵養を通じ、専門職業人としての能力と、よき社会人としての素養を併せ持つ人材を地域に送り出すことを使命として、社会の変化と要請に応じて不断の改革を行ってきた。特に平成 25 年度からの長野勇学長による大学改革の取り組みにおいては、地域への眼差しと国際的な視野を併せ持った人材育成を実現するため、大学の国際化が重点的に推進されてきた。今回、高等学校を卒業してわずか半年の短期大学 1 年次生の 2 名が、海外インターンシップに参加し、無事に全行程を終了できたことは、本学の教育改革の確実な一歩として極めて重要な意味を持つといえるだろう。

本学からは、今回 ICT&ビジネスステージに在籍する 1 年次生 2 名が参加した(写真 1)。2 名は当初より本事業への強い関心を示していたが、実際に参加を決意するまでには若干の時間を要した。引率教員による二度の面談の結果、正式な参加申込みに至った。彼らの主たる不安は、すべて年上となる金沢大学からの参加学生と良好な人間関係を構築し、2 週間を楽しく過ごせるかという点であった。この点については、塚脇氏が金沢大学からの今年度参加学生、過去の参加学生、そして小松短期大学の学生による情報交換会を設け、渡航前の事前顔合わせの機会を作ってくださったことにより、随分と学生の不安が抑えられたようである。この件に限らず、塚脇氏は学生が不安なくインターンシップ期間を過ごせるよう、常に学生の様子を観察し、丁寧な対応を実践されていた。その学生への姿勢から、私自身学ぶことが大変多かった。塚脇氏の学生へのきめ細かい配慮に対し、改めて感謝の意を表したい。

一方で、渡航前の人間関係の構築に対する彼ら



写真 1. 初日のミーティング

の不安は杞憂に終わったようである。インターンシップ開始後、学生同士はすぐに打ち解け、良き仲間として 2 週間の業務を協力し合いながら楽しんでいった。彼らが業務中に見せる真剣な表情や本当に楽しそうに公団職員や現地の子供達と交流する姿に触れるたび、本事業が彼らにとって確実な成長の機会となっていることを実感したことを記憶している (写真 2, 3)。彼らと地元の安い食堂で夕食を取っている時、彼らの口から“小松短期大学に来てよかったです”という言葉が聞けたことは小松短大に勤務する教員として大変に胸が熱くなったと同時に、このインターンシップが彼らにとっていかに参加の意義を実感できる貴重な機会となっているかを理解することができた。また、金沢大学の 2 名のチューター、河本麻実さんと長谷川美華さんの貢献にも大変感謝をしている。朝夕のミーティングでの健康管理、業務管理は引率教員としても大変頼もしいものであったし、本学学生にとってもインターンシップ期間を通じて心強い存在であったに違いない。

彼らが現地で何を学んで帰国したのかについては、参加学生の個別の報告書に詳述されているためここでは詳しく言及しないが、日本にいる時に期待していたよりも遥かに大きな土産を持って帰国したことは間違いないであろう。かけがえのない仲間を得たこと、実際のカンボジアでの生活を通して異文化への理解が深まったこと、積極的なコミュニケーションの重要性やさらなる英語学習の必要性の認識など、彼らが持ち帰った成果は多岐に渡る。

彼らが参加の申込みについて逡巡している際に、不安を感じながらも参加を決断したことで、彼らはこのように多くの成果を上げることが出来た。この経験から、私個人としては国際交流事業の実務を担当する者の重要な使命の一つは、学生に海外に出る決心をさせる手伝いをするのではないかと現在は考えている。



写真 2. 公団でのディスカッション



写真 3. 西パライでの記念植樹

2013年に本学国際交流センター長の島内俊彦准教授が実施した調査によると、本学在学生の約3割の学生が海外留学に興味、関心を持っていることが示された。その一方で、本学の国際交流事業への実際の応募者はそれと比較してかなり少ない。このことは、海外に行きたいという意欲の問題と、実際に国際交流事業への参加の機会が提示された時に参加を決意できるかという問題は、ある程度別の問題として捉えるべきであることを示唆している。海外留学プログラムの選択肢を充実させるといった制度的充実ももちろん重要だが、そういったプログラムへの学生の参加をただ待つのではなく、参加・不参加の境界で迷っている学生に対し、一歩踏み出す決意をさせること、そのプロセスにどの程度教職員が関わることが短期大学における国際交流事業を成功させるための鍵となるのではないだろうか。

また、本事業への参加学生が語学力への不安を示したため、引率教員による日常英会話の研修を渡航前の事前教育として実施した。この事前研修については一定の効果があつたと考えられるが、2週間の引率業務と帰国後の学生との対応を通じて、インターンシップを終了し、帰国した後のアフター・ケアを検討・実施することの方が本当に重要なことではないかと感じている。海外インターンシップへの参加前は、自身に不足している点や必要な事前学習についての理解やイメージが明確ではない状態であるのに対し、帰国後は、2週間の滞在と業務体験によって自分自身の今後の課題、今後の希望が明確なものとなっていると考えられる。現地で感じた悔しさや嬉しさ、感動の経験が鮮やかに残っている時期には、更なる英語学習や次の海外留学への挑戦に対して高い動機づけの状態に置かれていると考えられる。一方で、高い動機づけに置かれた学生が自分だけの判断で次の一歩を踏み出せるとは限らないだろう。学生が抱いている漠然とした希望や、やる気を形にするため、具体的に今後どのような挑戦が可能であるか、次に設定すべき目標と目標を達成するために取り組むべき学習内容は何か、大学の教員・職員が学生と共に考え、次の選択肢を示すことが出来れば、帰国後の学生のさらなる成長につなげることが出来ると期待できる。

海外インターンシップ、海外語学研修に参加した学生のアフター・ケアは、国際担当の教職員のみによって行うのではなく、学生に関連する教職員と連携して検討することが望ましいと考える。業務を担当する教職員がある程度限られることもあつてか、ともすれば国際関係事業は他の大学行事とは別枠の扱いを受けやすいように感じる。しかし、当然のことではあるが、参加した学生個人にとっては時間的に連続した学生生活の中の出来事である。他の通常の学生生活と独立したもののように扱うのではなく、関係教職員が次に始まる日本での学生生活にどうつなげるかを検討することは、学生の教育を考える上で自然な流れではないかと考えている。

帰国後、本学1年次生全員を対象とし



写真4. 小松短期大学での報告会

てカンボジア海外インターンシップ報告会が開催された（写真 4）。報告会において、参加学生は自身の 2 週間の経験について自信を持って発表してくれた。寄せられた難しい質問にも果敢に答えようとする姿は大変頼もしいものであった。

本学の国際化への取り組みはまだ始まったばかりであるが、本事業に参加した 2 名の学生は他の学生にとって非常に良いモデルとなってくれた。当日会場で報告を聞いた 1 年次生にとっては、短大生活の 2 年間に海外に出ることがこれまでよりも身近なことに感じられたのではないだろうか。今回のアンコール遺跡整備公団での学生インターンシップの成功が、今後一人でも多くの短大生に留学を決意させるきっかけとなってくれることを願うばかりである。

最後に、本事業への本学学生の参加のためにご尽力をいただいた関係諸氏に改めて深謝申し上げるとともに、本事業の更なる発展を心から祈念申し上げたい。

4. インターンシップ参加学生の報告

1) アンコールインターンシップに参加して

金沢大学人間社会学域国際学類 2年 瀬戸利之^{りえ} (グループ 1)

8月23日から9月6日の間、アンコールインターンシップに参加した。私は今まで欧米の先進国しか行ったことがなかったため、アジア、東南アジア、発展途上国がどのようなところなのか分からなかった。今回の経験で、東南アジアや発展途上国としての面について色々なことを学べたと思う (写真1)。

私たちグループ 1 はルンタエプロジェクトという、アンコール世界遺産に指定されているエリアに住む人々の支援について学んだ。ルンタエというのは新しい村のことで、アンコール遺跡群に住む人々をルンタエに移そうという計画である。アンコール遺跡群は開発や観光化が進み、そこに住む人々の人口は増加しており、住む場所がなくなっている。彼らは一つの家は何人もの人が住む



写真1. 遺跡の保全について学ぶ

ことを余儀なくされている。また遺跡、文化の破壊が問題になっている。そこでアンコール遺跡群の人口を減らし、村人を守るために新しい村を作ったということを経験した。ルンタエはアンコール遺跡の郊外につくられ、家は無償で提供される。観光客向けにもホームステイができるとのことだ (写真2)。

村での生活は自給自足で、主に農業を中心とした生活をする。農作物は無農薬で、ルンタエの農作物をつかったオーガニック商品 (例えばアイス) を観光客に売り出すという計画もある。しかし実際に視察に行ってみると、様々な問題が見えた。まず村は閑散としていることが印象に残った。人はあまり住んでおらず、家も空き家が多い。風車は壊れ、畑になるはずだった広大な土地も、さら地になっている。ルンタエに人が集まらないという現状だ。それはなぜか。



写真2. ルンタエ村

ルンタエへは交通アクセスが悪く、道も舗装されていない。市場は村から離れた場所にあり、バイクで15分ほど走らなければいけない。レストランも、病院も、お寺もない。土地は荒れていて肥えず、農作物が育たない。農作物が育たなければ、食糧もなく、仕事もない。仕事がなければお

金がない。アンコール遺跡からルンタエクも遠い。最初は多くの人がルンタエクに来たが、戻ってしまった人々も多かった。

塚脇先生はルンタエクのモデルになったといわれるロヴィアという村に連れてってくださった（写真 3）。カンボジアの人にとって、お寺という存在がいかに大切かということを教えてくれた。お寺は村の中心となる存在である。お寺は宗教的な役割だけでなく、学校、病院という様々な役割を持つそうだ。最後に頼れる存在、心の拠り所がお寺なのである。アンコール遺跡には寺院があるし、それがそこに住む人々



写真 3. ロヴィア村の子供たちと

の心の拠り所となっているのだ。彼らにとってアンコール遺跡は聖なる場所である。ルンタエクには、お寺が存在しない。それがどういうことなのか、何故ルンタエクに人が住みつかないのかがよくわかる。ルンタエクの土地にはもともと人は住んでいなかった。“人が住んでいない場所に人を住ませることは大変”そこに人が住まないということは、その場所は住むことに適していないということだ。塚脇先生の言葉はとても印象に残った。

私たちは、これからのルンタエクについて話し合った。このプロジェクトはうまく進んでおらず、このままではプロジェクト自体がつぶれてしまうのではないかという懸念があった。私たちが出した提案は、「ルンタエクの目的を変える」ことである。アンコール遺跡の人々を定住させることは、現段階では非常に難しい。まず、ルンタエクに人を定住させ、人口を増やしていくことが先であると考えた。私たちが出したアイデアとしては、まず市場の代わりにスーパーマーケット、コンビニのような生活必需品が手に入るお店を建てること、そこに村人を雇用すること、経営は国、もしくは公団がすること。次に、農業を生産させるような村ではなく、別のものを生産させる村にすること。職人を集めて民芸品を作り、売る。フェアトレードの村にする。都市部の人をここに動かす、などである。しかし、難しいことではあると思う。最終目的のアンコール遺跡の人々が移住するということが、はたしてできていくのかどうかかわからないと思った。ルンタエクプロジェクトは、何十年、何百年もかかるプロジェクトなのだろうと思う。

アンコール遺跡を視察していると、売り子の女性や幼い子供が土産品を売ってくる。しかもしつこくついてきては商品を押し付け、ずっと値段を言ってくる。積極的だ。この光景は日本では見られないと思った。貧しさからなのか、こうまでもしないと生活がままならないのかと思った。私は行く前に、幼い子供の売り子には飴ちゃんをあげようと思っていた。子供にお金を渡しても、大人に渡るだけで、せめて子供のお腹に渡るようなものをあげたいと思った。しかし、観光客としてみて、マナーとして、これはどうなのだろうかと疑問に思ったので、塚脇先生に尋ねた。先生は「何かをしてもらったらお礼にあげればいい」と仰った。

話を聞くと、観光客が子供にお菓子たくさんあげて、虫歯が蔓延したらしい。なるほど、それは良くないと思った。聖なる場所の遺跡、寺院に肌を露出した格好、また遺跡を傷つける行為はマナー違反として常識に欠ける。しかしお菓子の件も、観光客として気を付けなければいけないことだと思った。良いことだと思っても、それが良くないことに繋がることもあるのだと思った。

遺跡は色々な国が携わっており、各国の色々な方法で開発、修復が行われている。カンボジアは発展途上国なため、カンボジアだけではあの広大なアンコール遺跡を保全していくことは経済的にも、技術的にも難しい。しかし、たくさんの国が携わっているということは、各国色々なやり方があり、その分ズレが生じる。そこから、非常に深刻な問題が浮き彫りになっていることがわかった。ある国は手抜きだったり、ある国は土手を守る大切な木々を伐採してしまったり（そのほうが、景観がいいからだという）、またある国は生命力の強い外来種の木々を植え、他の木々を枯れさすなど、キリがなかった。

一番驚いたことは、アンコールワットを訪れた時である。壁にはたくさんのアプサラ女神が彫られていて、額には赤いビンディがあった。ヒンドゥー教だからかと思いきや、某国が修復時に勝手に額につけたという。カンボジアの歴史、文化をきちんと知ったうえでやるべきと怒りがこみ上げた。勝手に、ましてや他国の歴史的遺産に自国の文化を取り入れることは良くないと思う。その国の文化を尊重するべきだ、と私は思う。

遺跡を視察していて一番考えさせられたことは、遺跡をどのように保全していくか、ということである。例えばタプローム遺跡では、修復前と修復後の写真を見ることができる。そこで思ったのは、修復前のほうが良いと思ったことだ。私の考え方だが、遺跡というものは時の流れで自然と融合し、歴史を感じさせ、諸行無常であることを訴えるものが遺跡だと考える。私は、タプロームで大木が遺跡を巻き



写真 4. タプローム遺跡にて

込んで生えていることに感動を覚えた（写真 4）。壊れてしまった遺跡、積み上げられた石達……。しかしタプロームは綺麗に修復されてしまっていた場所もあった。それはまるで同時にタイムスリップしたように。当時を再現することも、また歴史を感じられるし遺跡であるということは理解できる。

私は、カンボジアとしては遺跡の保全方法はどのような理念なのだろうかと公団に尋ねた。返ってきた回答は、カンボジアは観光業に依存しており、それがなければ経済が成り立たない。復元したとしても、それは柱の一部などを新しくしただけである。結局は当時の建物というようには、復元できないのだから。時の流れを感じさせる遺跡、当時を復元した遺跡、観光客が見やすいようにバランスを保って行っている。それは難しいことだが。と答え

た。当時は王朝としてのアンコール遺跡，歴史史跡としてアンコール遺跡，観光資源として重要なアンコール遺跡，遺跡は時代によって役割が変わるものだと分かった。

私は今回の経験でたくさんのが学べて，本当に嬉しく思う。私は米英コースだが，国際学類として様々な国に興味を持ち，学んでいきたいと思う。そして視野を広げ，本当の国際人として，国際社会に貢献できたらなと思う。今回のインターンシップで，それがきっかけになり，視野を広げられたと思う。

2) 一生にできるかできないかの体験 in カンボジア

金沢大学理工学域環境デザイン学類 3年 加納望音^{もね} (グループ 1)

2015年8月23日～9月5日の約2週間の間、カンボジアのアンコール世界遺跡整備公団へのインターンシップに参加した。このインターンシップに参加した理由は、私の専攻である環境デザイン学類で、都市計画、交通計画、景観デザイン、上・下水道等について積極的に学んでいるからである。その授業の中では都市の形成、観光産業を起爆剤とした地域の活性化、インフラ等について考察している。これらの内容は世界遺産のあるカンボジアで問題になっているインフラ整備、観光業と地域住民との共存などの問題につながると思った。そこで、実際に現地に行くことで授業では取り扱われていなかった海外の様々な状況を五感で感じて学んだり、現地の方の考え方を知ったりすることができると思った。

私のイメージしていたカンボジアという国は、映画やテレビで見るような発展途上国で今でも地雷や食糧不足で苦しめられているというマイナスイメージであった。そんな、自分勝手なイメージから、カンボジアでの生活に多少の不安があった。それと同時に、実際のカンボジアの住民の生活を見たり、現地の人と話してみたりしたいという思いもあった。

初めて飛行機の階段からカンボジアの地に降り立った。慣れるまでは、水をホテルから近いスーパーに買いに行くのでさえ、道路で命がけになったり（車やバイクが近くまで迫ってくる）、新しく買ったサンダルを泥水につからせながらカッパを着て歩いたり、日本では体験しえないことばかりで、毎日がドキドキであった。食事は、バイチャー（チャーハン）、ロックラック、フォー、野菜の炒め物など口に合うものばかりで、何も言うことはなかった。特によかったものとしてシェイクがある。大体1.5ドルほどで、マンゴー、パイナップル、ココナッツなどの果汁100%のシェイクが飲めるのである。しかし、毎日のようにシェイクを飲んでいると、そのシェイクは現地の水道水を使用しているせいか、おなかの調子がだんだんと悪くなるのが難点である。

現地での業務以外での交通手段としてトゥクトゥクがあり、おおよそ2ドルで乗車することができる。業務のない休日には、マーケットへ買い物に行ったりした。マーケットでは観光客であるとわかると値段を高くして売ろうとするので、値切るのが当たり前だった。また、私たちのことを、顔を見ただけで日本人であると判断し、日本語で話しかけてくるのには驚いた。他にも、休日にはトンレサップ湖で船に乗り、水上住宅をみたり、半年間水につかっても枯れない木を観察したりした。また、象に乗ることもできた。

カンボジアでまず思うのが、住居が日本とは全く違うことである。しっかりしたお店や、ホテルなどでは、コンクリートの建物になるが、基本的に住民の住居は2階建てで木を原材料としており、一階は壁がなく吹き抜け状態になっている。これは、カンボジアの気候に深く関係している。カンボジアは基本的に気温が高いため、1階を吹き抜けにすることで、風を1階から2階に送り通気性を良くし、熱気を上に押しやることで、1階部分を涼しくす

る。したがって、住民は一日のほとんどを 1 階部分で過ごし、生活の場となっている。そのほかにも、驚いたことはコンクリート製の建築物に鉄筋ではなく竹筋を使用していたことである。今まで、竹筋という言葉でさえ知らなかったのが勉強になった。

ある日、業務の帰りにスクールが急に降ってきたことがあったが、その際道のすぐわきにあった家で雨宿りをさせていただいたことがある。その時やバイクが故障して修理を待っている間も家主は快く受け入れてくれ、家の椅子に座らせて休ませてくれたりした。道行く人も会釈してくれたりと温厚な人柄が身をもって感じられた（写真 1）。アプサラ公団の方たちも私のつたない英語を一生懸命聞き取り理解しようとしてくれ、もっと英語力があればより内容の濃い会話ができたのではないかと、自分の力のなさを痛感した。



写真 1. 村の兄弟

このインターンシップでは、4つのグループに分かれ業務を行った。私は、ルン・タ・エクエコビレッジの担当であったが、それに限らず、アンコールエリアの各遺跡の神話や歴史、構造、伝統的なカンボジアの家、人工的な貯水池など他の分野についても学ぶことができ、自分の今までの視野を広げることができた。以下に、詳細に記していこうと思う。

平日はアプサラ公団の方たちの指導のもと業務地へ赴いた。主に午前中はルン・タ・エクエコビレッジ、アンコールエリア内などの遺跡、バライ（人工的な貯水池）などの視察に行き、その場でそれらについての知識を学んだ。午後には、午前中に学んだことについてのフィードバックを行った。これらの視察地へは、アプサラ公団の方たちが使用しているモーターバイクの後ろに乗ったり（写真 2）、マイクロバスに乗ったりしての移動が主であった。



写真 2. 出勤の光景

私たち（グループ 1）の担当したルン・タ・エクエコビレッジは、シェムリアップシティからバイクで 1 時間ほどのところに位置する新しい村である。アンコールエリアでは景観を守るため新しい建築物を建てることを禁止されている。しかし、昔から住んでいる住民

の人口が増加しているため余剰人口をアンコールエリアから移す目的でつくられた。現在は約 100 軒の家があるが、将来的には 800 軒にする予定だという。

土地の使い方としては、村の中心を湖とし、その周りに家や学校などを建て、その周りを農地にするという構成である。家の材料や土地は無償で与えられるが、生活水は地下水から、食物は自分たちで作ったものや、少し遠くにある市場まで買いに行かなければならないので、ほぼ自給自足の生活を余儀なくされる。ルン・タ・エクエコビレッジは全部で 1012 ha あり、そのうちの 15%が住宅地、25%が学校などの公共スペース、60%が農地になる予定であるという。

この村の問題点として、1) アンコールエリアからの距離がある、2) お寺や市場がない、3) 水車等の公共施設の維持管理がなされていない、4) 土地がやせているため農地としての機能を果たさない等がある。去年、このインターンシップに参加した先輩の話だと、湖のほわりには風車が、村の農地には野菜や果物があつたというが、今回の訪問では風車は壊れてなくなっており、農地は農作物が枯れてしまい、代わりに養鶏場ができていたりした。このように問題点は多く、解決するのに多くの年月を要するものばかりであった。また、他の村と比べて閑散としており、地域住民との交流が少ないように思えた。

バライと呼ばれる人工的な貯水池がアンコールエリアを取り囲むように、4つ（このうち2つには現在水は存在しない）存在する。北バライの北の方には、山から流れてくる川の管理としてスルースゲートを設けたり、北、西バライへの水供給として川からの水路を設置したりしてある。これらの水路などの設置により、洪水が発生した際にアンコールエリア内に水が浸入するのを防ぐのだという。

このうち西バライでは、1) 地下水などへの水の供給、2) 灌漑への使用、3) 生活水としての利用、4) 洪水などが発生した際の貯水池としての利用目的が挙げられる。西バライへの水は水路から供給されるが、バライに水が入る前に沈殿池があり、これは大量の土砂がバライ内に入りバライ内の水位が低くならないように防ぐ役割がある。

一方の北バライでは、上記の 2 以外が該当する。北バライでは、バライの中央にニャックポアンという寺院が存在し、昔、この寺院は病院として機能していた。寺院の周りと四方の窪地はすべて水で満たされている。今は木が生い茂って秘境のようになっているが、近い未来に、当時の状態に近づけるために木はすべて切るそうだ。

修復された遺跡やまだ手が付けられていない遺跡を多く視察に行った。手が付けられている遺跡は修復された部分のはっきりわかるような周りと全く異なる素材や色の違う修復のされ方をしているものが多かった。また、左右対称の遺跡が異なる国によって修復されているため、それぞれの国の特徴が出てしまい、違和感のあるものになってしまっているものもあった。当時の姿を現在の原材料を使って、しかも修復したことをわかるように修復した方がいいのか、それとも、危険個所だけを修復し、時間の流れを感じさせる方がいいのかを考えさせられた。

また、タプロームなどの遺跡を訪れた際には、バスを降りると同時に物売りの子供たち

が寄って来たりする。以前は物売りがとても強引で腕をつかまれていたそうだが、現在は、公団などからの注意などによりましになっているという。遺跡の出入口にはお土産屋さんなどもあった。その人たちは、物売りが本業ではなく、農業をしている傍らの副業のようなものである（写真 3）。しかし、お土産屋さんといっても、日本でいう屋台のようなものが軒を連ねているようなもので、景観的にあまり良いとは言えない。

確かに、観光業で地域住民はお金を得ていると言えるが、観光客も観光客でゴミを落としていたり住民のことをあまり気にかけているようには思えなかった。というより、それが当たり前になってきてしまっている気がする。観光業とその地域住民の共存はもう少し時間がかかりそうであった。

このインターンシップに参加することを決める前にはこの 3 年生の大事な夏休みをカンボジアに 2 週間も割いてもいいのだろうか悩んだ時もあった。しかし、家族や先生方からカンボジアにインターンシップに行くチャンスはないから行っておいでと背中を押され、参加することを決め、今では一番良い選択だったのではないかと思う。まだまだ、インフラ整備や、貧富の差など解決せねばならない問題は多く残されている。今、自分が何を何のために学んでいるのかを考えさせられた。今回のインターンシップでカンボジアの公務員のような立場の方たちのお仕事に携わって、仕事に熱心な姿を見て、将来私も国民のために何かできる仕事に就きたいと思った。

最後に、塚脇先生をはじめ、木村さん、チューターの麻実さん、美華さん、運転手のペンさん、アプサラ公団の皆さん、金銭的支援をしてくださった家族の皆さん、本当に、ありがとうございました。



写真 3. 砂糖作りのお姉さん

3) 微笑みの国、カンボジアにて

金沢大学人間社会学域国際学類 4年 野村 結^{ゆい} (グループ 1)

今回参加させていただいたカンボジア、アプサラ公団でのインターンシップについて報告させていただきます。

私は今回のこのインターンシップへの参加を留学している際に決意しました。帰国後にまたすぐに海外にでることに少し不安はありましたが、もっと自分の知らなかったようなことを見て、聞いて、知りたいという好奇心から応募をしました。その当時は昨年以前の報告書を読み、胸が高鳴っていたのをよく覚えています。実際に、カンボジアでの 2 週間には想像を超えて充実した貴重な経験をさせていただきました。

今回のインターンシップで自分の中で 3 つの目的がありました。一つ目は、カンボジアでの人々の生活を知り、考え方・価値観を教えてもらうということでした。東南アジアに行ったことはなかったため、人々がどのように生活しているのか想像が付きませんでした。最初の印象は、カンボジアの人々の笑顔の多さでした。どんなときでも微笑みを返してくれるその対応に何度も心が癒されました。カンボジアの人々は皆、心が豊かであるということに気がつきました。

今回のインターンシップではルンタエクというエコビレッジでの業務を担当させていただきました。このエコビレッジは、アンコール遺跡のあるエリアでの余剰人口をエリア外に作った村に移住してもらうというプログラムです。アンコールエリアでは昔からの景観・遺跡の保存を目的として新しい住居をエリア内に建てるのが法律で禁止されています。しかし人口は増え、新しい家族も増えています。その環境で住むことができなくなった人たちのための新しい村です。

この村に住む家族には家、耕地や生産活動のための土地が与えられます。その村は新しく綺麗で、小学校もあります。初めてその村に到着したとき、こんなに自然がたっぷりの綺麗な村に住めることがうらやましくさえ思えました。しかし、公団のスタッフ、そして塚脇教授とのディスカッションによりこの村の問題が浮き彫りになりました。その問題とはこの村はシェムリアップ市内から遠く離れており、市場もなく生活の利便性が低いということ。そして人々の村というコミュニティに必要なものがそろっていないということ、農作や稲作に不適な土地であるということでした。画期的なアイデアだと言われていたプログラムはここ数年で行き詰まってしまっているという



写真 1. ロヴィア村の子供たちと

現実を知りました。

その村だけではなく、ロヴィアというとても歴史のある村へも視察にいきました(写真1)。その村には中心があり、その中心を囲うようにして人々が生活しており、人々の生活はお互いにとっても近いものであるということが明白でした。そこに根付いた人々の生活はゆったりと生き生きとしたものでした。道ゆく人は珍しい外国人に少し驚きながらも微笑んで挨拶をしてくれました。その雰囲気の違いに驚き、そしてルンタエクエコビレッジの抱える問題をさらに考えるきっかけとなりました。

しかし、このプログラムはまだ終わっていないので、活性化するための案をグループのメンバーと話し合いました。その話し合いの中で少しずつこの村でできることが見えてきたように思えます。問題を深く理解し、原因を探る過程のなかで少しずつ解決の糸口が見えてくるということを知りました。人々の生活を知らなければこのプログラムの趣旨と人々の生活の食い違いを感じるができなかったと思います。この業務を通して人々の生活をより深く、より身近に感じる事ができたように思えます。

そして二つ目の目的は海外で日本人として働くということがどういうことであり、そのためには何が必要であるかということを知るということでした。このインターンシップの責任者である塚脇教授の姿を見て学ばせていただきました。公団のスタッフとの会話はもちろん英語でしたが、お互いに母国語でない英語でのコミュニケーションはやはり理解の齟齬が出てしまうように思えました(写真2)。



写真2. 公団スタッフとのディスカッション

しかしこの齟齬を埋めることができるのが「愛嬌と低姿勢」というキーワードであったと思います。この姿勢で人に接することができれば必ずよい距離感でお互いのことを尊重しながらコミュニケーションがとれるということを実感しました。その姿勢はスタッフ間や公式な場だけではなく、市場などの人と人が接する場面ではいつでも良好な関係を築くために必要なものであるということであり、これから私がより広い社会で活動をしていく際の重要なキーワードになってくると確信しています。簡単なことなのかもしれませんが、このように海外で働く日本人の方からその事実を学べたことがとても幸運だったと感じています。

そして最後にカンボジアの歴史、自然といった古代から受け継がれてきたものの重さを知るということでした。

カンボジアへ行く前、もちろんアンコール遺跡やクメール文化については高校の世界史程度で知っていましたが詳しいわけでもなく、乏しい知識しかありませんでした。しかしこのインターンシップを通して想像を超える量の情報を得ることができました。アンコー

ル遺跡のことはもちろん、アンコールエリアでの水管理の仕方、アンコールでの歴史や神話など、日本にいてインターネットや本で読むだけでは決して得られない情報をたくさん得ることができました。また、草原の広大さ、スコールでの激しい雨の力強さ、アンコール遺跡の高いところから見た夕日の美しさに心は何度も打たれました。カンボジアでの生活は自然に抗うことなく自然に生かされ、共存しているということにとっても魅力を感じました。これらのことは実際に行ってみなければわからないことだったと思います。やはり、世界にはまだまだ知らないことがたくさんあって、それを一つ一つ自分の目で見て感じていきたいという思いが強まりました。今回のインターンシップを経て、さらにいろいろなことを深く、広く知っていききたいと世界のあらゆることへの好奇心がかき立てられました（写真3）。



写真3. 遺跡の上から見た夕日

この三つの目的をしっかりと果たすことができたことは私にとって大きな成功体験であったと思います。これもすべて綿密に計画を立ててくださった塚脇教授、そして学務の方々のおかげだと思っています。そして、今回一緒にインターンシップに参加したメンバーの方々も最年長の私を優しく受け入れてくれていたからであると思っています。このインターンシップで学んだことをこれからの人生に生かし、また私が得させていただいた知識や考え方で何か還元できるものはないのかということをしっかり考えていきたいと思っています。貴重な経験をさせていただき本当に感謝しています。これでアンコール・インターンシップの報告を終わらせていただきます。

4) 初めての途上国

金沢大学人間社会学域国際学類 2年 盛田佳歩^{かほ} (グループ 2)

大学 2 年目の夏、私は 2 週間にわたるカンボジア・アンコールインターンシップに参加しました。それまではカンボジアに対し、アンコールという貴重な世界遺産を持つ反面、各国から侵略されたりポルポト政権によって大虐殺がなされたりした過去を持つ発展途上国であるという印象を持っていました。正直に告白すると、カンボジア人は豊かな生活を送れているのだろうか、貴重な遺跡を守る力が、技術があるのか、と思っていました。よって私は実態を知りたくてこのインターンシップに参加しました。

私は最初カンボジアに対して、途上国だからという理由で治安、衛生にかなり不安感を持っていました。初日、空港からホテルに着くまでには、乱雑に絡み合ったたくさんの電線、そして現地人によるバイクの危険な 3 人乗り、見慣れない食べ物などが目に入り、いくつものプチカルチャーショックを体験しました。

一晩過ごしたことで大分カンボジアにも慣れ、インターンシップ業務が始まりました。私たちは北バライ、西バライ、ルンタエク・エコヴィレッジ、洪水対策の 4 つのチームに分けられました。バライとはアンコールパーク内にあるカンボジア特有の古代貯水池のことです。その一部は現代でも残っており、今でも貯水池として利用されています。通常の貯水池と違う点はその建築方法にあり、地面を掘って



写真 1. 西バライチームのみなさんと

作った穴に水を入れるのではなく、平地に長方形の堤防を築き、その中に水をためるように作られています。私は他の 2 人とともに西バライチームに参加し、アプサラ公園の方から主に西バライについて教えていただきました。業務では、特に西バライチーム担当の 6 名の方に大変お世話になりました (写真 1)。彼らとのコミュニケーションはすべて英語で、お互いなかなか言いたいことが伝わらず大変でしたが、彼らは本当に親切で、私が何度聞き返しても優しく教えてくれ、そのおかげでたくさん学ぶことができました。西バライチームは現地に視察しに行くなど移動することが多かったのですが、その都度彼らのバイクに二人乗りをさせてもらいました。

西バライはバライの中でも最大規模で、南北に 2.2 キロメートル、東西に 8 キロメートルもあり、一度に 5,600 万 m³ 以上の水を貯えることができます。中心にはメボン (写真 2) という遺跡建造物があり、現在フランスがその修復作業を行っています。満水時には水面がメボンの近くまで迫り、ちょうどメボンが浮かんでいるように見えます。古代の人々がバライ

の中にそれを建てたのは、ヒンドゥー教の神話を信じ、それを再現しようとしたからであり、その神話とは、この世界が誕生する際そこには海と一つの山しか存在せず、その山からヴィシュヌ神が誕生した、というものです。海をバライの水、山をそのメボンに見立てたのです。それを裏付けるように、メボンからは巨大なヴィシュヌ神の石造の胴体部分が発掘されており、メボンはヴィシュヌを祀るためのものだったといわれています。それだけでなく、メボン内の水位とメボン外の水位が一致することを知っていた古代人は、波の立たないメボン内の水位を測り、バライ全体の水位を把握していました。



写真 2. 古代のメボン再現図

次にバライを取り囲む堤防についてです。堤防は古代も現代も変わらず土で作られています。そのため激しいスコールの雨、風、バライ内からの波によって浸食が進みます。今もその浸食部分の修復が進められていますが、機械を使わず人の手で行っているため、長い年月がかかります。修復の仕方は、まず崩れた土壌を取り除き、一層ずつ土壌を固めていき、元の形に戻すというものです。ここでは古代の景観を保つため、そしてより持続的な堤防を築くため、コンクリートは使いません。私も少し修復作業に参加しましたが、土を固める工程が特に大変で、少しずつしか進まないにもかかわらず、かなり体力の要する仕事でした。もとの形に戻すと、次に土壌の浸食を避けるためその上に植林します。私たちも西バライの西側に植林させていただきました（写真 3）。



写真 3. 西バライでの植林活動

三つ目にシェムリアップの給水体系についてです。まず、カンボジアには雨季と乾季があります。雨季には、バライは洪水を防ぐため、上流からの水を貯める貯水池として利用されます。乾季には、人々が水を供給してほしいとアプサラ公団に頼むと、公団が西バライ南部にある水門（アウトゲート）を開き、そこから各地に張り巡らされた水路を通して水が供給されます。その水は農業水として利用され、田んぼやトウモロコシ畑に行き渡ります。このようにカンボジアでは年中水が豊富で暖かいため、米の収穫は年に 2, 3 回も行うことができます。また、人々はバライとは別の場所で汲み上げられた地下水を飲料水としていますが、近年汲み上げる水量がはなはだしく、地下水が汲み上げられることによって遺跡下の地盤が傾き、遺跡が崩壊してしまうという問題があがっています。その対策として、アプサラ公

団は地下水の少なくなった土地にバライから水を供給し、遺跡の崩壊を防いでいます。また、現在アプサラ公団はバライの濁った水を浄化して飲み水にしようと考えています。

業務時間外には様々なことを体験しました。ナイトマーケットでお土産を買ったり、マッサージをしに行ったり、孤児院にお邪魔させてもらって子供たちと遊んだり（写真 4）、トゥクトゥク（タクシーのようなもの）に乗ったり、民家にお邪魔したり、遺跡を見に行ったりしました。そこで感じたのは、どんな時も、どこへ行っても、そこで出会う現地の人々は明るく、フレンドリーだということです。



写真 4. 孤児院の子供たちと

ナイトマーケットの醍醐味は何といてもお店の人と値下げの交渉をすることですが、彼女たちは知っている少しの日本語と簡単な英語を駆使して客の私に対応してくれました。マッサージでも話しかけられ、「イタイ？キモチー？イチ，ニ，サン！」と知っている日本語で話しかけてくれました。トゥクトゥクでも民家でも孤児院でも、いつでもどこでも歓迎してくれました。誰もあたふたしておらず皆のんびりしていて、昼ご飯の後にはハンモックで一休み（カンボジアにはそこら中にハンモックがあります。）、そういったゆったりとした生活を送っていました。私はそれをうらやましく思います。誰も焦ってイライラしておらず、だから他人と楽しくおしゃべりする心の余裕があり、自分たちの生活に満足し幸せそうでした。私が最初の頃に心配していた治安も全く問題なく、スリには一度も会いませんでした。カンボジア・シェムリアップは私が想像していたよりはるかに豊かなところでした。

このインターンシップに参加できたおかげで、私のカンボジアに対するイメージ、または途上国に対するイメージが変わりました。貧しさを感じさせず、皆豊かに、満足そうに暮らしていました。日本ではあまり見られない、初対面の人に対する人懐っこさ、親切心がどこへ行っても見られる、温かい国でした。遺跡整備の面でも、給水体系がしっかりしていてあまり心配はいりませんでした。また堤防の修復にコンクリートを使わず古代の景観を保つように努めるなど、日本が見習うべきところがたくさんあると感じました。

最後に、このインターンシップでお世話になった塚脇先生、大学関係者の方々、アプサラ公団の皆さん、カンボジアでドライバーをしてくれたペンさん、一緒に参加した仲間、感謝申し上げます。このアンコールインターンシップがこれからも継続していくことを願っています。

5) オークン・チュラン!

金沢大学人間社会学域国際学類 2年 若宮野乃花^{のの} (グループ 2)

私がこのインターンシップに応募しようと思ったきっかけは、昨年度前期に履修した「大学社会生活論」の中での説明会でした。それまでは他の遺産に比べてアンコールワットが特に好きというわけではなく、カンボジアに対しても強い思い入れがあったというわけでもありませんでした。しかし、このインターンシップを経て、カンボジアという国、シェムリアップという街、アンコール地区という地域は、間違いなく自分の中で特別な場所になりました。

インターンシップ先は、アンコール地区の維持管理を行うアプサラ公団です。私が所属していたグループ 2 は、アンコール地区の中でも西側に位置する「西バライ (West Baray)」の管理を行っているチームに同行し、様々な業務を体験させていただきました。西バライの「バライ」とは現地の言葉で「(水)を貯める」「池」といった意味があり、貯水池のような形をしています。バライは内側を掘って作らず、代わりに外側は高い堤防 (dyke) で覆われています。また、バライの中央には寺院 (Mebon) があります。この 2 点がバライと日本で一般的な貯水池との大きな違いです。

西バライはアンコール地区にあるバライ 5 つのうち最も大きく、長さは縦 8 キロメートル、横 2.2 キロメートルもあり、最大で 5600 万立方メートル以上の水を貯める事ができます。しかしバライの中の水は飲用に適さないため、灌漑システムによって、農業用水として西バライの南に位置する田畑に供給されています。飲料水は西バライ近くのウォータータワーから地下水を引き上げて供給されていますが、将来的にはバライの水を飲用水としても活用できるようにしたいと公団の方々はおっしゃっていました。西バライは「澄んだバライ」の別名を持ち、はじめて行った際はたくさんの子供たちが泳いでいるのを見ましたが、バライの水を飲用水として使用するにはまだまだ改善の余地があるそうです。

西バライにも中央に West Mebon と呼ばれる寺院がありました。インターンシップの時期は雨季で、田畑や河川に水が行き渡っていたため、西バライへ続く水路の水門が閉じられており、西バライの中の水位は下がっていました。そこで、私たちは西バライの中央にある West Mebon まで、



写真 1. バイクで移動中

なんとバイクで移動しました(写真1)。道はぬかるんでいて運転してくださった公団の方々は大変そうでしたがバライの中だとは信じられませんでした。昨日はバライの中で泳いでいる子供を見たのに…と改めて西バライの広さに驚きました。肝心の West Mebon は崩れてしまったため修復中でした。青いブルーシートがかかっていたり、材料となる石が積み上げられていたり、工事現場のようになっていました。現在 West Mebon はフランスとの共同作業で修復しており、修復作業は4年後まで続くと思われていて、雨季には機材の運び込みができない関係で長引くおそれもあると聞きました。

きれいな状態の寺院を見ることはできませんでしたが、そもそもどうしてこんな場所に寺院があるのかという興味深いお話を聞くことができました。ヒンドゥー教の神話に基づく、世界が海と一つの山(後にここでシヴァ神が誕生)しかなかった時代を表している、というお話でした。つまり、バライが海、West Mebon が山の象徴であり、人々はこれに祈りを捧げることが出来たのです。ヒンドゥー教、仏教のお話は遺跡の見学をした際もたくさん聞きましたが、西バライでの業務中にも至る所に神話が関わってきました。

その他に、西バライ周辺、田んぼのたくさんある地域、水門、水路(canal)、浸食の修復地区など、多くの場所に行き、西バライチームの業務を学びました。西バライチームの中には観光部門、考古学部門、保護部門と更に3つのチームがあり、ただ物理的に修復を行うだけでなく、観光客が訪れるように夕陽を見る展望スペースを作ったり、古代から使われてきた堤防を守るために古くからの方法で手間をかけて浸食を修復したりといった工夫がなされていました。しかし、業務中西バライ周辺で観光客を見ることはほとんどなく、観光客用に設置された建設物は閑散としていました。

West Mebon が修復中なのも関係があるかもしれませんが、やはり多くの観光客はアンコールワットやアンコールトムへ集中するのでしょうか。公団の副総裁であるプーさん(と呼ばれていました)とのディスカッションで、バライをクルージングして West Mebon に立ち寄り、そのまま反対側に抜けてアンコールワットを見に行ったり、その逆ルートで遺跡を見終わった観光客がバライに訪れられるようなプランを考えたりしているというお話を聞き、公団内でも西バライへの観光客の呼び込みは重大なプロジェクトであるのだと感じました。

私はこの「観光地としての西バライ」に業務の中で一番関心を持ちました。というのも、父が、もともと観光地ではないところに観光客を呼び込むのは大変なことだと言っていて、そのことが頭をよぎったからです。私の生まれ育った町も、西バライ周辺のような自然豊かで稲作が盛んなところで、父は今そこで観光客を呼び込むための市のプロジェクトに参加しています。確かに自然は豊かで気持ちがよく、食べ物も美味しくて人々も温かい町ですが、目立つ歴史遺産や温泉、エンターテイメント施設もなく、黙っていても観光地が訪れるような都市と比べれば明らかに観光地向けではありません。近隣に非常に有名な世界遺産のある西バライですら、観光客の呼び込みに苦心しているという事実は、観光事業や町おこしを考える上でも非常に参考になりました。

業務を始めるまでで一番の不安材料だったのは、業務中は英語しか使えないことでした。きちんと会話することができるかどうか、公団の方のお話が聞き取れなかったらどうしようと何度も考えましたが、この心配は杞憂に終わりました。文法や語彙は完璧でなかったと思いますが、意見や提案、質問を活発に発言することができ、何と言ったらいいかわからないときは同じチームのメンバーと協力して公団の方と



写真 2. 業務前のひとこま

話していました。また、公団の方々も私たちが分かりやすいようにゆっくり話してくれたり、分からなかった単語は何度も繰り返して教えてくれたりと非常に親切に接してくださいました。バイクに乗って業務に向かう道中にも「おはよう、朝ごはん食べた?」「It's OK って日本語でなんていうの?」「この病院は無償で診てくれるからカンボジア全土から患者が来るんだよ」とたくさん話しかけてくれ、話していくうちにどんどん不安や緊張はなくなっていきました(写真 2)。また、道路脇で売っている昆虫のフライを勧められたり(私たちは食べませんでした、カンボジアの女性は喜んで食べるそうです)サトウキビをその場で絞ったジュース(ビニール袋に直に入れていました)を頂いたり、日本ではできない経験もさせていただきました。

業務以外の生活も、非常に楽しく過ごしました。私は辛いものが苦手なので、カンボジアに来る前は「東南アジアの料理って辛いもの多そうだし何も食べられなかったらどうしよう……」と心配していたのですが、私たちが宿泊していたホテルの近くにはたくさんのレストランがあり、美味しい料理を毎日食べすぎるくらい食べていました。カンボジア料理の中では特にロックラックという肉料理がお気に入りでした。薄く切った肉を甘めのソースにからめて食べるのですが、お店によってソースの味が違うため、どこが一番おいしいのかと食べ比べていました。また、南国のフルーツもスーパーや村のマーケットにいろいろな種類が置いてあり、朝ごはんにはバナナやパイナップル、パッションフルーツ、ランブータンなどを食べていました。フルーツを使ったシェイクがど



写真 3. 絶品マンゴーシェイク

のレストランにもあって(写真 3)、夕食時には必ずと言っていいほど飲んでいたので、

今まで日本で飲んだシェイクとは比べ物にならないほど美味しく、帰国した今、とても恋しく思います。自由時間はナイトマーケットで買い物をしたり、マッサージやエステを受けにいったりと、思い切り楽しみました。

今回のインターンシップで、私は個人的な目標を一つ設けていました。それは、道中や現地での日本語の採集です。私は日本語教育について学んでいるので、現地での日本語に関心があったのです。乗り換え先のインチョン空港では「マーケット O のブラウニー」が「マケッオブラ優だの」、明らかにシフォンケーキのようなものが「たいやき」と表示されていて衝撃でしたが(写真4)、カンボジアで

日本語に触れる機会は圧倒的にマーケットやトゥクトゥク(タクシーのようなもの)の客引きでした。「おねえさん」「おにいさん」「やすいよ」「みていって」「1(いち)ドル」など、単語レベルでしたが私たちの顔を見るなり日本語で話しかけてくるのです。観光地にいる小さな子供たちでさえ、このくらいの日本語は難なく操っていましたし、1から10までくらいなら日本語で数えられるようでした。この人たちはいったい何か国語話せるんだろう、どうやって日本人だと見分けているんだろうと不思議に思いました。この「観光客用の日本語」というのは、ほかの国に行ってもよく耳にするものなのかもしれませんが、私には初めての体験で、印象深く覚えています。



写真4. インチョン空港の謎の日本語

緊張していたのか、帰国直後はどっと疲れが襲ってきましたが、本当に多くのことを学び、様々な体験が出来た2週間でした。これまで考えたこともなかった業務に携わり、英語でディスカッションやフィードバックを行い、世界遺産という一大観光地の抱える問題やその解決案に触れる。ただ普通に生活しているだけではなかなか出来ないことだと思います。このような素晴らしい機会を与えてくださったインターンシップに関わる方々、特に現地でのお世話をさせていただいた塚脇先生、木村先生、チューターのお二人、事務手続きをさせていただいた寺井さん、辻谷さん、そして受け入れ先のアプサラ公団の皆さんには本当に感謝しています。オークン・チュラン!(ありがとうございました!)

緊張していたのか、帰国直後はどっと疲れが襲ってきましたが、本当に多くのことを学び、様々な体験が出来た2週間でした。これまで考えたこともなかった業務に携わり、英語でディスカッションやフィードバックを行い、世界遺産という一大観光地の抱える問題やその解決案に触れる。ただ普通に生活しているだけではなかなか出来ないことだと思います。このような素晴らしい機会を与えてくださったインターンシップに関わる方々、特に現地でのお世話をさせていただいた塚脇先生、木村先生、チューターのお二人、事務手続きをさせていただいた寺井さん、辻谷さん、そして受け入れ先のアプサラ公団の皆さんには本当に感謝しています。オークン・チュラン!(ありがとうございました!)

6) アンコールインターンシップを終えて

金沢大学人間社会学域国際学類 3年 中山雪枝 (グループ 2)

8月24日から9月6日までの2週間、わたしはカンボジアでアンコールインターンシップに参加しました。このプログラムに参加した理由は、わたしは今までアジアの国々を訪れたことがなく、カンボジアがどういう国なのか自分の目で見てみたいと思ったからです。また、インターンシップの業務内容がアンコール地域の保全や水管理などであったため、観光客としてアンコールワットなどの遺産を訪れるより様々な情報が得られるのではないかと考え、とても興味深く感じました。インターンシップの業務は英語で行われるため、将来は英語を生かす職業に就こうと考えているわたしにとって、英語力やコミュニケーション力を磨く良い機会になると思い参加しました。

わたしにとって初めてのカンボジアということもあり治安や生活環境、一緒に参加する仲間やアプサラ公団の方々とのコミュニケーションなど不安なこともありましたが、2週間はとても早く過ぎ去り、充実した毎日を過ごしました。

日本を出発し、シェムリアップ空港についてみると予想以上にとてもきれいな空港でした。また、カンボジアではホテルで寝泊まりしていましたが、ホテルも感じがよく、わたしが出国前に想像していたイメージとは正反対でした。しかし、ホテルでは、部屋の電気がつかないとホテルの人に迷惑をかけた（電気がつかなくなったのはわたしの勘違いでした）、また、わたしの部屋のクーラーの水漏れがひどくなり、翌朝起きたら床が一面水浸しだったりといろいろなことがありましたが、ホテルの人に伝え解決することができ、今ではとても良い思い出となっています。完璧な英語ではなくても、身振りや手振りも交えて話してみることが大切だと気づきました。

インターンシップ業務では、わたしは西バライチームに所属しました。バライとは貯水池という意味で、貯水のほかに農業に水を供給したり、貯水池の真ん中にある寺が崩れないようにしていたり、将来的に飲み水として活用したりなど様々な役割があります。シェムリアップにはほかにもいくつかわライが存在しますが、西バライは横8km、幅2.2kmあり56,000,000m³の水をためることができる一番大きなバライです(写真1)。



写真1. 西バライのようす

西バライには3つのチームがあります。一つは観光業に関するチームで、観光客を呼ぶために日の出や日の入りスポットを作ったり案内したりするチーム。二つめは考古学に関するチームで、西バライの歴史や寺について調べるチーム。三つめは保護に関

するもので、このチームは堤防、植樹、浸食というようにさらに三つに分かれて活動しています。

1週目は、バライの役割や重要性、その周りを囲む堤防やバライの真ん中に建つ寺メボンについて実際に現地を訪れて学びました。バライを囲んでいる堤防は、10世紀に作られたそうです。今はコンクリートで作られた部分もありますが、昔からの手法によって土で作られている部分も存在しました。土の堤防を作るには、まず土の表面についている雨によって運ばれた砂などを取り除き、その後、ローラーを使って土を押し固め、またその上から土を乗せてこれを繰り返して丈夫な堤防を作っていきます。人の手によって作られるので、多くの時間が必要です。また、土だけでは崩れやすいため、表面にワッティワという草や木を植えて雨から守っていました。

次にメボンについてです。東南にあるバライを除き、すべてのバライには真ん中にお寺であるメボンがあります。メボンはヒンドゥー教を信仰していた昔の人々が、ヴィシュヌ神を祭るために作ったものです。そして現在は、バライの水位を観測するための役割を果たしています。メボンが水に囲まれている理由は、ヒンドゥー教の三大神のひとりであるヴィシュヌ神は海に囲まれた山で生まれたと言われており、彼の生誕した状況に似せるためだからだそうです。世界遺産になっているアンコールワットやアンコールトム、その他のバライのメボンが水に囲まれているのも同じ理由です。西バライのメボンは現在修復中でした。アプサラ公団とフランスのチームが協力して修復活動を行っています。しかし、雨季には大雨が降り、バライの中心に存在するメボンに行くにはボートしか手段がなくなり機材を運べないため、乾季の間に作業を進めるしかないのが修復完了には時間がかかるそうです。

2週目は、西バライの堤防の浸食や水門や灌漑システムについて学びました。堤防は土でできていて、浸食が進んでいる部分が多くありました(写真2)。小さいものから崖みたいになっている大きなものまで様々でした。浸食部分の修復も堤防を作るときと同じ工程で人の手によって直されるので、多くの時間がかかります。また、大きく浸食している危ないところから修復が優先されるので、小さい浸食部分が大きくなるのを未然に防ごうとしても人手が回らないそうです。修復作業を体験させてもらいましたが、土を運んでそれを手作業で固めてまた運んで、という作業は重いうえ土で汚れるため、とても大変で地道な作業であることを実感しました。



写真2. 西バライの浸食部分

次に水門についてです。西バライには水が入ってくる水門は2つ、水が放出される水門は1つあります。水が入ってくる水門のうち、一つはトロピアンクチョンと言う名の水門で、昔から存在し今も使われています。シェムリアップ川から西バライに水を運んでいま

す。西バライの別名は **water clear Baray** と言いますが、これはトロピアンクチョンが水と一緒に運ばれてきた砂を止めているからです。水門の開け閉めは機械ではなく人の手によって操作されています。水門の開け閉めも体験させてもらいましたが、とても重たくて大変な作業でした。水門は、水の量を調節し人々を洪水から守ったり、アンコールエリアに水を供給したりする重要な役割を持っていることを知りました。

また、業務中に訪れたのは西バライだけではなく、アンコールワットに行ってアプサラ公団の方から様々な神話についての説明を受けたり、伝統のクメール様式の家を見学したりしました。業務最終日にはみんなで西バライを訪れ、堤防の斜面で植林活動をしました。天気もよく植林日和で良い体験ができました。アプサラ公団の方々もみな優しく、素敵な人ばかりでした（写真 3）。



写真 3. アプサラ公団の人たちと

カンボジアでの生活は、日本では体験できないことをたくさん体験することができ、とても新鮮な気持ちでいっぱいでした。インターンシップの業務中は公団の人のバイクの後ろに乗せてもらい移動していました。日本ではバイクに乗る機会がなく、最初は不安でしたが、公団の人とさまざまな話をしたり、風がとても気持ち良かったりとバイク移動はとても楽しかったです（写真 4）。業務後はマーケットやスーパーへ行き買い物を楽しみました。滞在中は孤児院に訪れる機会も設けていただきました。行く前はどんな子がいるのだろうと緊張していましたが、日本語で歌を歌って迎えてくれたり、一緒に遊んだり、カンボジア語を教わったりと、想像以上に元気で優しい子供たちと過ごす時間はとても楽しかったです。



写真 4. バイクでの移動中

カンボジアでの食事は、塚脇先生がいろいろなお店を紹介してくださったり、連れて行ってくださったりしたので、毎回の食事が楽しみでした。しかし、わたしは最初の 1 週間はお腹を壊していたので普段より食べられなかったのが残念でしたが、カンボジア料理のバイチャやロックラックのほかにベトナム料理や中華料理など様々なものを食べることもできてとても幸せでした。公団の人たちと外でお昼ご飯を食べた時は、「カンボジアでは手で食べるんだよ」と言われ、鶏を一匹丸ごと焼いたものをみんなで囲みながら手で食べました（写真 5）。カンボジアの食事風景が少しですが理解できて興味深かったです。

わたしが、カンボジアに滞在している間に気になったのは、病院でした。ホテルから公団のオフィスや西バライに行く途中に、Kantha Bopha Hospital という病院がありました。その病院は子供と妊婦さんであれば無料で診察してもらえるそうで、毎日大勢の人が病院の前に居ました。日本では、決められた年齢までの子供には地方自治体から補助が出て医療費が無料になりますが、カンボジアでは助成金などがないため、病院にかかるると全額自費だそうです。だから、人々はみなその病院に集まるそうです。この話を聞いて、日本とカンボジアの医療制度の違いを実感しました。これを機にカンボジアの社会のしくみなど詳しく調べてみたいと思っています。



写真 5. 西バライチームでお昼ごはん

また、雨が降った後にできる大きな水たまりも印象深く残っています。カンボジアの道路脇には側溝がないため、雨が降ったら水が流れず溜まっている場所が多く存在しました。日本の場合、道路脇には側溝が作られていて、それが普通だと思っていました。滞在中、アプサラ公団の人にカンボジアにはどうして側溝がないのかと尋ねたことがありますが、バイクで移動中だったこともありうまく聞き取れませんでした。道行く途中に大きな水たまりがあり、どうやって通ろうか悩んだことは忘れられません。

わたしのカンボジアでの 2 週間は、毎日様々なことを学び、そしていろいろな人と話し、非常に充実した日々となりました。こんなにもカンボジアが好きになるとは正直予想していませんでした。また、この 2 週間は自分自身を見つめなおす良い機会であり、またこれからの自分のやりたい事などを考える良い時間でもあったと思います。わたしは今 3 年生なのでこれから就職活動が始まりますが、この経験を生かして進路選択や将来について考えていきたいと思っています。最後に、塚脇先生はじめ、運転手のペンさん、チューターの麻実さん、美華さん、アプサラ公団の方々、一緒に参加した皆、関係者のみなさまに感謝します。

7) カンボジアでの経験

小松短期大学地域創造学科 1 年 辻野成瑠^{なる} (グループ 3)

私は今回 2 週間に渡るアプサラ公団インターンシップに小松短期大学としては初めて参加をさせていただきました。今回の参加を決断するにあたり、当初は積極的に行きたいと希望していたわけではありませんでした。もちろん、アンコールワットをはじめとする遺跡群を間近で見ることが出来ることや、遺跡の保全業務に憧れや魅力は感じていましたが、これまで海外に出たことの無い私にとってはそれよりも不安の方が大きかったというのが正直な感想です。ですから、私が参加を決意するまでには長い時間がかかりました。友人の牧田啓成に強く誘われたことが参加を決心する一番大きな後押しとなりましたが、今となっては強く背中を押してくれた牧田には本当に感謝をしています。

日本にいて得られるカンボジアについての報道はどちらかというとながティブなものが多く、私が抱いていたカンボジアのイメージとは、諸外国からの募金による支援が必要なほど貧困に苦しむ国というものでした。また、砂埃が舞う暑い国で、なおかつあまり平和な国ではないだろうとも考えていました。実際、出国前には母親が治安を心配しており、私が抱いていたカンボジアへのイメージは一般的な日本人の抱くイメージとそれほどかけ離れてはいなかったのだらうと思います。

出国前はそういったカンボジアという国に対するイメージから来る不安感だけでなく他にも様々な不安を感じていました。これから始まる 2 週間に対して期待感よりも不安感の方がはるかに大きくなっていたことを思い出します。私は短期大学の 1 年次生であり、金沢大学の参加学生が皆年上であることから、特に人間関係の構築に強い不安を感じていました。また、英語についても苦手意識があり、言語面でもコミュニケーションに不安がありました。

現地での生活全般に不安を抱えた状態で日本を出発しましたが、現地での 2 週間は想像を遥かに超える素晴らしいものでした(写真 1)。カンボジアについて抱いていたイメージはそのほとんどが間違いであることに気が付いたことは今回の大きな収穫であったと考えています。町には物乞いで生計を立てる人の姿はほとんどなく、子供たちはちゃんと学校に通っていました。土産物売りの子ども達に囲まれて困



写真 1. 現場視察で水管理を学ぶ

ったことは数多くありましたが、彼、彼女らは学校の無い時間帯に家の手伝いとして土産物売っているのを知り、勝手なイメージを子供たちに抱いていたことを申し訳なく感じまし

た。また、気候は暑いですが基本的に過ごしやすいものでした。ホテル、レストラン、ショッピングモール内の空調なども日本となんら変わらず快適でした。コンビニまであり、思っていたより栄えていることに驚きました。また、印象的だったのは、カンボジア人の温厚な人柄でした。比較的控えめな国民性とのことですが、ニコニコと笑顔を見せて接してくれたのが嬉しかったです。控えめでよくニコニコするのはなんとなく日本人にも似ているように感じました。

私は北バライと呼ばれる貯水池の管理に関する業務を担当しました。北バライは12世紀にジャヤヴァルマン7世によって作られたもので、今から約500年前に水がなくなったとのことでした。APSARA公団により北バライを元の姿に戻すための取り組みが行われており、2008年に再び水で満たされたとのことでした。500年間放置されていたことによって、北バライには木々が生い茂り、古の姿は失われてしまいました(写真2)。本来の北バライの姿に戻すため、APSARA公団によって木の伐採が進められています。



写真2. 木が生い茂る北バライ

北バライの中央にはニャックポアン寺院が配置されており、とても神秘的な雰囲気でした。ニャックポアン寺院は、昔は病院として使われていたとのことでした。ニャックポアン寺院は5つの池から構成されており、北バライの水が地下を通過して中央の池に貯まり、中央の池から周りの4つの池に水が流れていくという仕組みになっています。この構造には寺院の下の地盤を安定させる役割があることを学びました。また、北バライには生活用の水の安定供給という役割に加えて、洪水から町を守るという役割もあることを学び、バライが人々の生活にとってどれだけ大事な存在かを知ることができました。4つの池には人、ライオン、馬、象の形のパイプがあり、そこを水が通るように作られていました。この姿を見て、北バライは単に水の管理という意味で重要であっただけでなく、クメール時代の人々にとっては宗教的にも重要な意味を持った場所であったことを実感することができました。

今回インターンシップを終えて、いくつか反省点が明らかになりました。まず、英語力についてはとりわけスピーキングの能力の不足を痛感しました。公団の職員の方が話す内容の聞き取りはある程度出来ましたが、会話のスピードについていけなかったり、適切な言葉が出てこなかったりして一言も話せなかったことが多々ありました。英語の能力の問題だけでなく、積極的に話す姿勢が乏しかったことについても反省しています。もっと勇気を出して話しかけていれば、公団の職員の方のこと、公団の業務のこと等について、理解を深めることができたことと思います。

アンコールワットの視察に行った際には、回廊に施された彫刻について公団の方に詳しく

く説明をして頂きましたが、カンボジアの歴史、ラーマーヤナ、マハーバーラタといった古代インドの神話についての知識がほとんど無い状態でしたので、説明を理解することがとても困難でした。訪問する国の歴史・文化についての事前学習を怠ったことを反省しました。

今回、私が最も感謝していることは素晴らしい参加者に恵まれたことです。私とペアになってくれた磯部朝日さんにはいつも頼ってばかりで申し訳ありませんでしたが、彼の存在は私には本当に頼もしく、重要なものでした。頼りない私を見える場所、見えない場所でサポートしてくれていた磯部さんには本当に感謝をしています。ありがとうございました。また、私は人見知りをしてしまう性格ですが、チューターのおふたりを含め、参加者全員が私と仲良くしてくれたので、人間関係についてストレスを感じないで過ごせました（写真3）。



写真3. 公団職員の方々とバーベキュー

今後は、今回の経験を活かして他の国にも行ってみたいと考えています。今回ほどの経験が今後の海外渡航で出来るとは思えませんが、さらに視野を広げたいと強く感じています。また、今回痛感した英会話の力不足を補強するため、英語の学習にも取り組みたいと考えています。

今、海外に行くことを戸惑っている学生がいるならば、私はあまり考えずにとりあえず日本を離れて見ることをお勧めします。今回の私の場合は仲間に恵まれたという部分が大きいですが、とりあえず“行ってみればなんとかなる”というのが私の正直な感想です。今後も、多くの学生がカンボジアの地で良い経験を積んでもらえればと願っています。

今回このような貴重な機会を与えて下さった塚脇真二先生、お忙しい中私たちを受け入れて下さったアンコール遺跡整備公団の皆さま、出発前から帰国後に至るまできめ細かいサポートをして下さった小松短期大学の皆さまに心から感謝いたします。ありがとうございました。

8) 海外インターンでの自己変化

金沢大学理工学域物質化学類 3 年 磯部朝日 (グループ 3)

インターンシップの志望動機は 3 つある。ひとつは英語を業務で使うということで、自分の英語力を試し、また磨きたかったからである。大学受験で英語を勉強したものの、実際に使う機会が少なく、3 年生まで自分では進歩を感じられず、英語実践のいい経験になると考えた。

次に、アンコール遺跡の維持管理、また遺跡自体に大変興味を持ったからである。初めの説明会の時、アンコール地域は住居と遺跡が共存する世界でも珍しい世界遺産ということを知った。世界遺産の維持管理はただでさえ手間がかかる。それに加え、人々が実際に生活しているとなると尚困難となることは容易に想像がつく。ただ単に観光地として管理すればよいだけでなく、住民の暮らしのことも考えなければならないからだ。そんな困難な維持管理を行っているアプサラ公団 (アンコール遺跡整備公団) は優れた組織であり、柔軟な発想や珍しいアイデア、日本では得られない経験ができると思った。また自分は化学を専門に勉強しているので、その知識を生かしたい、またどんなところで化学が使われているのか実際に目で見て確かめるというのも目的の一つであった。

最後に様々な立場の人と意見交換し、視野を広げるためである。このインターンシップでは国際学類を含め様々な学類、また他校の生徒、他国籍の人と時間をともにする。勉強している内容、環境が違うので、普段とは違った考えに触れられる。

大まかであるが以上の 3 つが本インターンシップに志願した動機である。

私たちは 14 部門のうちの一つ、水資源管理部門での業務に携わった。初日は公団本部で簡単な自己紹介と 4 つのグループの説明を受けた。西バライ、北バライ、ルン・タ・エクエコビレッジ (余剰人口の移動を目的としたニュータウン)、洪水対策の 4 つのテーマごとに分かれて活動したのだが、私のグループは北バライを担当した。バライとは、アンコール王朝時代に作られた人工の貯水池で、北バライはアンコールトムの北東に位置する。東西 3.6 km、南北 930 m と現在機能しているバライでは西バライに次ぐ巨大な貯水池である。

私たちは、北バライを中心に、水の管理システム、役割などを実際に訪問して説明を受け、議論し学んだ。主に午前中がフィールドワーク、午後が公団オフィスでディスカッションという業務内容であった。

アンコール地域でのバライの役割は大きく分けて 3 つある。洪水を防ぐ、灌漑のための水の確保、遺跡の地盤の強化である。各水路にいくつもの水門が建設されており、水の量を調節可能で、雨季はバライに水を貯水するので、川や水路の水が増えすぎのを抑え洪水の防止になる。次にバライは、掘って作られたものではなく周りを堤防で囲んで作られたものなので、ためた水は自然に地面を流れていくことになる。しかもアンコール地域は扇状地であり、傾斜が比較的大きい土地なので灌漑水路には非常に適している。最後に遺跡の土壌は

砂と土でできているが、この赤土（粘土のような土）は水と合わさることで強度が増し遺跡の土台を強化している。各バライともに周辺の遺跡の土台強化に欠かせない存在なのだ。このようにバライは人が生きていくうえで、また遺跡が存続していくうえで非常に重要な水を確保しているのである。



写真 1. ビッグゲート

北バライは現在水がないのだが中に生えている木を切って外に出す作業をして

いるためだ。北バライは 12 世紀後半に作られたのだがそののち、堤防が壊れて 500 年放置されていた期間がある。その時に木が成長してしまい現在に至るそうだ。昔の状態に戻すために伐採を進めている。

実は北バライは灌漑のための役割を担っていない。そのため、アンコール地域の南東は雨季にしか農業ができない。対して西バライの水は灌漑のために使われていて南西地域は一年中農業ができる。以前は東バライが南東地域の灌漑用水を担っていたのだが現在その東バライに多くの人々が住んでいるため、貯水池として利用できない。これが南東地域の灌漑農業の大きな問題となっている理由である。公団側は東バライを使いたいのだが、経済上にも、人々の居住上の理由でも実現が難しい。

次に実際に訪問した設備、場所をいくつか紹介する。写真 1 はビッグゲートと呼ばれる水門である。手動で門の開閉を行い水量の調節をするのだが、同時にシェムリアップ川の水を 3 つに分けている。各バライへの水はここから始まっており非常に重要な水門である。

写真 2 はビッグゲートより下流域の水門であり唯一の自動開閉式のものである。自動といっても仕組みは原始的で水の流れが強くなるにつれて門が開閉する。門には鉄球が滑車によりつながっていて、水流の力が鉄球にかかる重力より大きくなった時に門が開くという仕組みだ。膨大な数の水門がある中自動式の水門が 1 つだけなのは、建設コストと技術がないからだ。



写真 2. 自動開閉式ゲート

写真 3 は古代の水路から北バライへの取水口である。現在は使われておらず、新しいものが別の位置にある。同じ場所に新しいものを作らないのは、古代の建造物を残すためである。ただ水

の管理をすればよいのではなく、昔のシステム、建造物を保存するのが世界遺産の維持管理の難しさだ。また公団では、堤防や水路を新しく作るのではなく、修復や造営を行っている。

写真 4 は北バライの中心に位置するニャックポアンという寺院である。ここは昔、病院として機能していたと考えられている。ニャックポアンは中央の池を4つの池が囲むような作りとなっている。写真では見えづらいが、各池には像（人、象、ライオン、馬）があり、その像の口から水が流れ出る仕組みとなっている。それぞれの池に土、火、風、水の4つの要素があり、症状によって池の水を浴びるとその病気が治ると信じられていた。

ここまでは神話的な話だが、この寺院には非常に興味深いシステムがある。バライの中央に位置するニャックポアンであるが、中央の池へ通じる水路やパイプは存在しない。バライから中央の池へ水が運ばれる仕組みは、「filtration」と呼ばれ、バライの水位に合わせて水が各小池の下を浸透する形で移動し中央の池に行くのである。各小池へは像の口に水位が達して初めて水が送られることになる。水、土壌の性質をよく理解した古代クメール人の知恵と技術の凝縮されていた。ただ、残念ながら訪問時は北バライの水がためられていない状態だったため、池に水があまりなかった。

以上のような場所を実際に訪問した。アプサラ公団は古代のシステムを尊重しており新しいものを作ることはできるだけせず、古代の水路、堤防の修復、必要な水門の建設のみを行っている。建造物は新しく手を加えているが、システム自体は古代と変わっていない。変わった点といえば、水量を操作できるようになったことである。古代の水利システムはただ水を傾斜に任せて流すだけの物だったが、現在は地域内の水90%を制御できる。

10日間の業務を通してアンコール地域の水資源管理の仕組みを学んだ。公団職員がよく話していたことは、「我々が行うのは修復、維持のみ。システム自体は古代と変わっていない」ということである。彼らは人々の生活を向上させるだけでなく世界遺産としてのアンコール地域を未来に残していこうという意識をもって業務に取り組んでいるのだ。別の視点から見ると、古代のシステムが優れていると言える。



写真 3. 古代の取水口



写真 4. ニャックポアン

先に、東バライが機能していないため南東地域の農業が思うようにできないと記述した。私は東バライに住んでいる人々を別の場所に移し、そこに再び水を貯めればいいと提案した。しかし、「そんなことは絶対にできない」と笑われてしまった。日本なら、ダムなどを作るとき政府が立ち退き金を支払うケースが存在するがカンボジアではそのような経済力がない。自分の考えは日本でしかできない非現実的な提案であった。他にもこのようなことがいくつかあった。まず日本の観念を捨て、カンボジア目線で解決策を考えることが最も重要であることに気付いた。



写真 5. フォー

業務以外での経験についても述べておきたい。入国してまず驚いたのが交通事情である。バイクの3人乗りは当たり前で、4人乗りや5人乗りも見られた。ヘルメットをかぶってない運転者も多くみられ、車間距離は狭くバイクは隙間に入ってくる。右側通行で慣れていないというのもあったが、交差点を横断するのは恐怖を感じた。というのも車は赤信号でも右折可能（日本でいう左折）で横断する方向の信号が青でも両方向から車が来て、何よりバイクの数が多し。とはいうもののすぐに交通には慣れて、むしろ日本の歩行者や運転者は信号に頼りすぎていると感じた。自分の身は自分で守るために信号を見ながらも周りの状況を常に確認することが大切だ。これは交通だけに言えることではなくすべてのことに言える。食べるもの、行く場所、発言、すべてのことに責任を持ち考え行動すべきと考えさせられた。

写真 5 は初めて食べた現地での食事だ。ベトナム料理で米粉からできている麺料理だ。さっぱりしていて食べやすくおいしいのでフォーは帰国まで何度も利用した。クメール料理のラクロックと呼ばれる肉料理は甘い味付けで、チャーハンや焼きそばなど多く利用した。クメールの料理は独特のスパイスが効いておりどれも食べたことのない味だった。



写真 6. ココナツ

カンボジアはフルーツが豊富でココナツは大変気に入る、よく利用した。すべて飲み終わったら実を半分に切ってもらえて、内側についている身を食べられるので2回楽しめる。触感はメロンのような感じだ（写真 6）。

カンボジアでのお酒は Angkor ビールか Anchor ビールを飲んでた。どちらも癖がなくすっきりと飲めるビールであった。シェイクがどのお店にもあり、しかもおそらく生のフル

ーツから作っているのが大変おいしかった。日本ではなかなか味わえないので貴重な経験になった。

休日は近くのホテルのプールに出向いた。地域の市民プールを想像していたが南国ならではのリゾートプールでサイドにはバーがあり、カクテルを飲みながらゆったりと過ごした。足つぼマッサージも利用した。30分 2.5ドルと格安であったが大満足だった。日本では考えられない格安料金だ。夕食の何回かは Pub Street という観光客向けに作られた繁華街で楽しんだ。ネオン街で気分もあがり、お洒落なレストランやバーがあり、現地でのお酒や食事を楽しんだ。

現地の子供たちはとにかく元気があり、のびのびと生活していた。笑顔であいさつしてきてくれて、こちらまで元気をもらった。自分が訪問した水門には、かなりの確率で子供たちが遊んでいて、中には水面まで6~7メートルはあるであろう高さから飛び込んで遊んでいた。大変活発である。日本なら危ないから遊ぶのを禁止する家庭が多いだろうがカンボジアの子供は自由にのびのび遊んでいた。

その反面、店で働いている子供が多く、ローカルレストランでは子供が食事を運んでくるのがよくみられた。お土産屋では片言の日本語で売りにやってくる子供がたくさんおり、家が貧しいのが読み取れた。中にはずっとついてくる子供もいて胸が苦しく感じた。こんなときお金やお菓子をあげる観光客が多くいるそうだが、それは問題解決にはならず、子供たちに勉強したり働いたりしなくてもお金が手に入ると思わせてしまう行為なので結果的に子供たちのためにはならないそうだ。子供にはのびのびと、遊び勉強してほしいが、家庭の経済事情を考えるとやむをえないのだろう。

孤児院も訪問したのだが、そこでの子供たちも大変活発だった。「遊んであげよう、楽しませてあげよう」と思って訪問したが、子供たちの方から「あそぼ、あそぼ」という感じで、こっちが「遊んでもらった」感じだった。本当に親がいない子供たちなのか疑うくらい元気で明るい子供たちだった。英語を話せる子が多く、日本語の歌もプレゼントしてもらい、感激した。

買い物は主にナイトマーケットとオールドマーケットという大きい市場で行った。観光客向けのお土産がたくさんそろっていて何度も出向いた。印象深いのが片言の日本語で話しかけてくる店員で「かっこいいね〜かわいいね〜あじのもと〜（おそらく味の素の意味は分かってない）」などと言ってくる。瞬時に日本人と判断する彼らに驚いた。また値切りを体験出来て、逆に値切らないで買ったものがないくらいであった。マーケットで売られているものは値札などなく最初に請求される金額は相場以上の値なので、値切らないと損であることが次第に分かっていった。

公園の人と長い時間過ごしたが彼らは知らない人にも声をかけ笑顔で話していた。職場内の人同士とても仲が良かったしすぐふざけあっていた。とてもフレンドリーで温かい人たちだと感じた。インフラが整っていないで、衛生にも問題があつてまだまだ技術も持っていない途上国に住んでいるにも関わらずなぜか不幸な感じを受けなかった。むしろ日本よ

り精神的に豊かで幸せなのではないかと感じたくらいだ。ただやはり、病気にかかっても技術がなく治せなかったり、法が整っていないがために不利益を被ったり、貧しくてやりたいことができなったりと発展途上国の負の側面もあるはずだ。今回のインターンシップではそのような面はあまり見られなかったが、それはシムリアップしか見ていないからなのかもしれない。

今回のインターンシップで一番の経験は異なる母国語の人々とコミュニケーションをとったことだ。私は英語が通じるように日本で聞き取りや発音、文法の勉強をしてこの日程に臨んだのだが、業務初日は全く歯が立たず、勉強不足を感じた。しかし現地の人はこちらがわかるまで説明してくださり、逆にこちらは何度も確認したり質問したりメモやジェスチャーで、正しい発音や文法を使えているとは言えないが、行動を起こした。すると、相手の説明もなんとなくだが理解できたしこちらの意見を相手に伝わった。そもそも相手もネイティブではないので聞きづらい訛りがたくさんあり文法もすべて正しいわけではなかった。しかし最後の方には始めより聞き取るのも慣れ相手に伝わりやすくなった。相手を思いやりコミュニケーションをとろうとする姿勢が一番大切であり、それを補助するのが英語力なのだと思えて実感した。

おそらく将来英語を使う相手は、非ネイティブの方が多いだろう。独特の訛りに対応し、伝わるように何度も何度も聞いたり話したり行動した経験はこれからの生活に必ず役に立つ。両者が第二言語でコミュニケーションをとれたことは自信にもなったしさらに英語を勉強しようという意欲にもなった。

見ること、聞くこと、感じることをすべてが新鮮で刺激的な2週間であった。何より、無事健康な体で帰国できたことが一番だ。これも綿密な計画を立て2週間引率して下さった塚脇先生をはじめ、小松短期大学の木村先生、チューターの美華さん、麻実さんの配慮のおかげである。本当に感謝したい。

9) シェムリアプの洪水対策業務を経験して

小松短期大学地域創造学科 1年 牧田啓成^{けいせい} (グループ 4)

今回、私は金沢大学主催のアンコール遺跡群でのインターンシップに 14 日間参加しました。私が参加を希望した理由は、短期大学に在籍する 2 年間のうちに海外を訪れ、将来への視野を広げたいと思ったことと、世界で最も観光客を魅了する世界遺産であるアンコールワットを訪れる良い機会であると思ったためです。また、自分の英語力を試したいという思いもありました。出国前は、衛生面や治安、食べ物など色々と不安な点がありましたが、日本とは違う生活を経験できることや、アンコールワット遺跡への訪問をとっても楽しみにしていました。

アンコール遺跡整備公団 (APSARA 公団) においてのインターンシップということで、始めは今回のインターンシップでの業務は清掃活動などの体を動かす業務が主だと思っていましたが、実際は、現地の歴史を学び、水路の構造などを把握するという考えることが主の業務でした。私が所属したグループ 4 は洪水対策運河などの維持管理業務を担当しました。このグループに割り当てられた業務は、シェムリアプに点在する水門を見て回りその水門の仕組みや水路がどこにつながっているのかということを知り、アンコール遺跡周辺の水管理システムと地域住民の生活とのつながりについて学び改善点を提案するというものでした。

カンボジアの 1 年は乾季と雨季に分かれているため、水門の適切な開閉によって 1 年間を通して一定の水量が下流へ流れるように調節することが重要であり、また、水は大切な資源であるが、一方で下流に流れる水量が多すぎると、下流に位置するシェムリアプ中心部の住民に洪水による被害をもたらすことを知りました。農業用、生活用の水の確保と地域住民を洪水被害から守るという 2 つの意味において、水門の管理は重要な業務である事が分かりました。また、北バライ (貯水池) の南に設置されているフランスが作った水門を除き、水門の開閉は手動であり非常に体力を使うことを知ったことも驚きでした。

業務の初日は、塚脇先生とチョウ副部長の御挨拶の後、学生達と職員達による英語での自己紹介がありました。自分にとって初めての英語での長文の自己紹介だったので身震いするくらいに緊張したのが忘れられません。その後、グループに



写真 1. バイクに乗っての出勤

分かれて担当業務を決め、アンコール遺跡およびその周辺の基本知識の学習を公団職員の方の説明によって行いました。

2日目からのインターンシップは、午前中に実際に現場に行き、公団の方から水門の仕組みなどの話を聞き、午後からは公団本部での講義、ディスカッションを行いました。毎朝ホテルから公団本部まで移動するのですが、現地までの移動が主に公団職員のバイクの後ろに乗っての移動でした（写真1）。こちらもとても良い経験となりました。

業務中はすべて英語での会話でした。自分自身の英語力の不足により、最初はスピーキングやリスニングが上手くできないことについて反省することが度々でした。また、辞書を使っていた時も嫌な顔せず待っていている公団職員の方の姿を見て申し訳なく思う時もありました。しかし、2週間の滞在を通じて私は積極的に話しかけることがとにかく重要であると気づきました。これからもこの気持ちを忘れず、もっと英語の勉強をして積極的に話しかけるように頑張りたいです。

初めて西バライ（貯水池）を見た時の感動は今でも忘れられません。横8km、縦2.2kmの広大な貯水池であり、1) Reduce the flood（洪水の予防）、2) Supply under grounded water（地下水の供給）、3) For agriculture（農業用水の確保）、4) Supply people everyday（人々へ生活用水を毎日供給）の4つの役割を有しています。

インターンシップ最終日には西バライに植樹をしました。アンコール時代から引き継がれてきた水管理の技術。そのもっとも象徴的な存在である最大の貯水池西バライ。最終日にこの地に植樹ができた事は、大変感動的で嬉しい体験でした。

カンボジアでの日常生活はとにかく物価が安く、食べ物も美味しかったため、不自由を感じることはありませんでした。私は友人とホテルの近くのショッピングモールに行き、生活に必要な物品や朝食を購入しました。また、シェムリアプは観光地であるため、パブストリートやナイトマーケットと呼ばれる通りに雑貨屋や屋台やバーなどが多数あったことには驚きました。その他にも日本食の料理店や美味しいイタリアンが食べられるレッドピアノという人気店、ベトナム料理のフォーが楽しめる場所に行くこともできました。

また土産物屋が軒を連ねるナイトマーケットでは、値切り交渉を身につけることができ、どこの店でも自然に”Discount?”という言葉が出てきました。

インターンシップがない休日にはトンレサップ湖を全員で見に行きました（写真3）。ボートに乗り湖の上を周遊しました。湖には家が建っており、多くの水上生活者がいました。



写真2. 西バライでの記念植樹

また、水上に土産物屋があり、すっかり観光地化していることも意外に感じられました。ボートに乗っている途中、彼方に見える山に蜃気楼が見えた時はとても興奮しました。

私がカンボジアに2週間滞在して、カンボジアに限らず海外に出て、積極的に自分から話しかけることがすごく大事であり有意義な事であると実感しました。なにより自分が成長できたと感じることは外国の方としゃべる度胸がついたことです。言葉も知らないのですがジェスチャーや単語を並べる事によって人間と人間が交流できる事が分かりました。何も話しかけなければ交流もできないし、積極的に自分から話しかけることで交流が生まれ、会話らしきものが出来ました。このことに気が付いたことが、今回のカンボジアでのインターンシップの一番の収穫だと思いました。

そして、その他に異国の地の日常生活やカンボジアの文化を知ることができたのも非常に興味深いことでした。例えば道の脇に豚、牛、サルなどの動物が歩いているなど、日本では考えられない光景を見ることができました。また、舗装していない道路や設備が行き届いていない村を見る事が出来たことも貴重な経験でした。

また、小松短大だけでなく、金沢大学をはじめ滋賀県立大学や埼玉大学の人達と男女問わず色々と話ができた事がとても有意義でした。今回の参加者の中には、海外に何か国も行かれている人がおり、その人の苦労談や経験談を聞くことができました。その話に自分は非常に影響を受け、自分も色々な国々を訪れたいと強く思いました（写真4）。

今回のインターンシップへの参加において、自分自身に足りなかった所は英語の勉強不足でした。会話が出来なかったり、自分から話かけられない場面が何度もあり、すごく残念な思いもしました。これが一番大きかったと思います。

私は今後とにかく英語を勉強しようと思います



写真3. トンレサップ湖の水上生活者



写真4. 公団本部でのディスカッション

した。また、英語が出来なかったことと同時に、カンボジア人、日本人に人見知りをしてしまい自分から積極的に声をかけられなかったことも反省しています。今後はもっと積極的に自分から声をかけられるような人間になっていきたいと思います。今回インターンシップに参加するにあたって一番感じたことは、語学力は勿論ですが物怖じせず積極的に話すことが重要だということです。英語を上手に話すことにばかりこだわるのではなく、身振り手振りで相手に伝わるように心掛けることもとても重要であると知りました。

今回、このような貴重な成長の機会を与えて下さった小松短期大学の米谷理事長、長野学長をはじめ、関係の教職員の皆さまに心から感謝を致しております。また。終始我々の安全で楽しいインターンシップのためにご尽力いただいた塚脇先生をはじめ金沢大学や埼玉大学、滋賀県立大学、APSARA 公団の様々な方々に感謝致します。

10) カンボジアでの2週間を通して

金沢大学人間社会学域経済学類2年 神谷卓磨 (グループ4)

8月24日から9月6日にかけてカンボジア国立アンコール遺跡整備公団で業務を行わせていただいた。約2週間のあいだ慣れない環境の中で、違う言語を話す方々と仕事することはこれまでに経験したことがなく、日本を発つ前は挑戦することへの大きな楽しみがある一方で多少の不安もあった。しかし、現地の職員の柔軟な対応や、なによりも彼らの仕事への熱意が伝わってきて、その不安はすぐに消え去った。彼らから学んだことや、それをもとに考え感じたことを含め、この2週間を通して自分がいかに変わったかを記述していきたいと思う。

今回のインターンシップ実施の知らせを受けたとき、すぐに申し込もうと思った。自分もともと古代遺跡に興味があり、それらを現在まで維持するのにどのような方法がなされているのか気になっていた。また、自分の英語力を含めこれまで学んできたことが海外の現場でどれだけ通用するのか、試してみたいという気持ちもあった。経済学を学ぶ者としてカンボジアのような発展途上国の現状を、講義で机に向かっているだけでは把握できないので、今回のインターンシップに参加して実際に現地に赴いて、そこから学んだ知識を以後の勉学に活用していきたいと思ったためである。

現地で自分が携わらせていただいた業務は、シェムリアップ地域の洪水対策に関してであった。1日の業務のうち午前中は水門や水路の視察を行い、どのように開け閉めしているのか、水路はどのような状態なのかを見て回った。午後はシェムリアップ地域の地図を見ながら午前中に視察した水門・水路が地域全体ではどのような役割を果たしているのか、また、全体の水門・水路がどのように連携して動くことで、地域の洪水・枯渇を防いでいるのかを学習した。ここを通る水は、シェムリアップの地域住民の生活用水などに使われているだけでなく、同地域に存在する多くのアンコール遺産もその恩恵を受けており、クメール朝から今までの長い間を経てもなお現在のように残っているのはこのような水が存在してきたためである。このように水は現在のシェムリアップ地域全体にとって非常に大切といえる。もちろん、言うまでもなくどこにいても人類にとって必要な資源である。しかし、日本のように水路が隔々まで完備されているわけでは



写真1. 水路を隔てる水門

ない。また、熱帯特有の気候により雨季の乾季の差が激しく、地域社会に一定の水を年間通して供給するためにはますます水門・水路の整備が欠かせないものとなってきているのである。

水路のほとんどは古代の水路を修復して作られている。しかし、日本のようにコンクリートなどで作られておらず、現地の人に日当の支払いをして彼らの手で掘られて、水路の修復を行っている。水門に関して言えば、シェムリアップのなかで、1つの水門を除きすべて手動で開け閉めされている（写真 1）。これは、資金がたりないという発展途上国ならではの問題である。より良い設備がないかと考えても、この問題に必ずぶち当たり、個人の力だけでは何もできないというもどかしさを感じた。

シェムリアップの西側と北側にそれぞれ、西バライと北バライという非常に大きな貯水池があり、クメール朝時代も今現在もその役割は変わっていない。複数ある役割のうち共通の役割は、洪水を防ぐということである。水路と水門を駆使してでも洪水を免れないほど大量の水が押し寄せてきたときに、西バライと北バライに水を流すことで防いでいる。

以上のように、遺跡や地域住民を守るために、経済的に厳しく制限されている状況で、ありとあらゆる知識を総動員してシェムリアップでの整備計画を進めている。また、古代人の知恵を源泉にしている面もある。このようなことを、実際に目の当たりにして見て、実社会での活動の難しさなどを感じるとともに勉学に一層励もうと思えるようになった。

私はこれまでアメリカに 2 度行ったことがあるが、発展途上国に訪れるのは初めてだった。現地の住民の暮らしを何回か視察する機会があったが、日本やアメリカとは全く違う暮らしぶりであった。基本的に自給自足の生活で、たいてい各世帯は自分たちの水田を持ち、町で売らるためのうどんの麺の小麦粉をこねる第一段階から家族総出で行っていた（写真 2）。また、観光客のおみやげ用の置物を手作業で作っている人々もいた。我々がたとえばツアーなどでカンボジアを訪れたとしても、このようにカンボジアの家庭の視察までするわけではない。すなわち、我々はカンボジアのにぎわった町を訪れてそこで提供される料理や販売されているおみやげを見てそれ以上深く考えることはないが、それらも郊外の町に住む住民たちが家庭の生計を立てるために、我々にとっては安い値段ではあるがひたむきに作っているという事実を目の当たりにして、考えさせられるものがあった。



写真 2. 地域住民の生活

1 週目の業務が終わり、日曜日にシェムリアップの南に位置するトンレサップ湖を訪れる機会があった。その湖は、雨季の時は琵琶湖の 20 倍、乾季の時ですえ 3 から 4 倍もの面積

を誇る巨大な湖である。その湖は、クメール朝の時代から今まで、カンボジア人の生活を支えてきた。我々が業務で学んできた水路を通る水も最終的にはここにたどり着く。そんな湖周辺をボートで遊覧していた時、思わぬ光景が目に入ってきた。水上生活をおくる人々がいたのだ（写真 3）。彼らの住む川やトンレサップ湖で採れる魚で生計を立てている。また、米などは近くの市場で買っているらしいが、主に水上生活を営む者同士でのモノの売り買いがされているようだ。これほど閉鎖的な経済のもと営まれている村があるのには、本当に驚いた。しかし、彼ら自身は自分たちが閉鎖的であるとは考えていない。なぜなら、その村に生きてその村で死ぬということがほとんどで、外界の技術発展などにそもそも目を向けていない。自分たちの現状の生活に満足ということなのか。現地の人に直接うかがうことはできなかったが、彼らの笑みから何かを感じとらなければならぬと思った。



写真 3. 水上生活者の子供たちの学校

今回の 2 週間のカンボジアでのインターンシップはとても私にとって大きなものであった。日本で勉学に励むことも大事であるが、実際それには限界がある。大学に至るまでの教育機関で学んできたことやインターンシップに行く前にカンボジアについて調べたことを踏まえ、自分ではほぼ準備完璧と思い込んでいた。しかし 2 週間滞在してみて、自分が気づかなかった新たな目線でのモノのとらえ方や、学んできた知識を現場で応用することの重要性を身に染みて感じた。そういった意味でも、自分の専門も含め様々なことを学び、それを現場で生かし、そこからさらに浮き彫りになった疑問を解決するために勉学をする、また、現場での経験を通してフィードバックすることが学習において非常に重要であると思った。

最後に、今回のインターンシッププログラムを手掛けてくださった公団職員の方々、そして 2 週間現地での生活を全面的にサポートしてくださった塚脇真二教授、チューターのお二方に感謝するとともに、今回の経験を生かして今後の大学生活をさらに有意義なものにしたい。

5. チューターの報告

1) チューターとしてのインターンシップ

金沢大学理工学域環境デザイン学類 4年 河本麻実

2015年8月23日から9月6日までの約2週間、アンコール遺跡整備公団のインターンシップに今年はチューターとして参加させていただきました。昨年までの埼玉大学に加え、今年は小松短期大学、滋賀県立大学の学生も加わり大所帯となるため、チューターも2人体制でした。明るく元気で活発な学生ばかりで、2週間大きなハプニングもなく、とても充実したインターンになりました。

チューターとしての大きな仕事は8人の学生を金沢からシェムリアップまで連れていき、2週間後にはまたシェムリアップから金沢まで無事に帰ることでした(写真1)。今年は富山空港発着でしたので、ゆとりを持って行動できました。そして現地では、主に学生の行動把握と体調管理を行いました。出勤前と夕食前にホテルのロビーで集合し、ミーティングを行って、体調の確認と何時にどこを誰と出発して、帰りは何時にどこに到着するかの予定をチェックしました。小松短期大学と合同で人数は多いですが、グループ数は昨年と変わらず4グループなので、問題なく対応できました。



写真1. シェムリアップ国際空港に到着

平日は朝8時から8時半にかけて、APSARAのスタッフの方がホテルまで迎えに来ていただいて、バイクの後ろに乗って直接現場に向かいます(写真2)。今年はルン・タ・エク・エコビレッジ、西バライ、北バライ、洪水対策の4グループでした。バライや村、水門などはそれぞれ担当のスタッフと行動しましたが、アンコールワットやアンコールトムなどの遺跡や伝統的な家を学べるクメールハビタ



写真2. 出勤風景

ットは全グループで講義を受けました。歴史や神話などは変わるものではないので、今年は2度目の講義でしたが、これだけのものを長年残して伝えてきたこと、そして人々がそこで暮らしているということに改めて感動しました。

午前中は現場に出て、お昼は一度ホテルに戻ってみんなでご飯に出掛け、午後はオフィス

でディスカッションという流れが主でした。2週目になり、慣れてくると現場からスタッフとご飯を食べてそのままオフィスに向かったり、1日中現場だったりすることもありました。ディスカッションでは、地図や図を使って水管理についての解説を聞き、疑問をぶついたり、話しあったりしました。全て英語で行うため、意思疎通に苦労はありますが、どの学生も積極的に発言していました。

16時に業務が終わるとホテルに戻り、19時のミーティングまではそれぞれ自由に過ごしました。ホテルの近くに小さいマーケットがあるのでショッピングを楽しんだり、マッサージに行ったり、部屋でのんびり休んだり、それぞれリラックスした後は、ミーティングを行って夜ご飯に出かけました。ホテル周辺で済ませることもあれば、トゥクトゥクを乗り合わせてナイトマーケットなどの店を連ねるパブ・ストリートに出かけることもありました。ネオン街に心が踊り、様々な国の観光客が訪れる観光地としてのカンボジアの一面を知ることができました。

ここで夜ご飯のお店を決めるのもチューターの仕事のひとつでした。去年よく行っていた海苔スープが美味しい中華料理店がなくなってしまい、今年の子生に伝えられなかったのは残念でしたが、クメール料理をはじめ、インド・タイ・中華・ベトナム・イタリアンなど各国の料理を食べることができ、新たな開拓もありました。大好きなチャーハンはず変わりなく、今年もたくさん食べました（写真3）。他にも南国ならではのフルーツ、アイスやスムージーも絶品で今年の子生たちも満足したようでした。



写真3. バイチャーとフレッシュココナツ

2週間チューターとして過ごし、去年との大きな違いは自由な時間が増えるということでした。チューターが2人体制ということもあり、仕事を分担するとできることが多く、様々なことに挑戦しました。

まずは、アンコールワット周辺のバリアフリー調査です。これは小松短期大学の木村先生の調査の助手ということで微力ながら協力させていただきました。車いすや妊娠中の方、小さい子供たちの視点からトイレや階段を調査しました。段差や幅、トイレではトイレトペーパーの高さまで細かく計測しました（写真4）。トイレには障害者用があり、中には手すりと十分な



写真4. 階段の計測

広さがあり、アプローチはスロープの設置により可能でした。しかし、子供用の便器やオムツ替えの台などは見られませんでした。

階段は段差が大きいため、車いすでの使用は介助者がいても難しい場合がありました。しかし、門に入ると通路は幅が十分にとれているため、アンコールワットの壮大さ、繊細さを味わうことが可能でした。このような視点でアンコールワットを歩いたのは初めてでしたが、世界的な観光地として調査し、問題点を明らかにすることはとても重要だと感じました。より多くの観光客が快適に楽しんでもらうために、景観に大きな変化がないように改善を加える必要があると考えました。

また、学生たちがディスカッションを行っている間の手のあいているスタッフや、訪れた孤児院の子どもたちにクメール語を教えていただきました。聞き慣れない発音が難しく苦勞し、単語と簡単な会話を教えていただきましたが、その国の言語を使うことで、教えていただいたスタッフや孤児院の子どもたちが喜んでくれて、少しだけ現地の人々の心に寄り添えるような気がして嬉しかったです。

去年との変化という点でカンボジアでの 2 週間を振り返ると、たくさんの驚きがありました。去年担当したルン・タ・エク・エコビレッジを再び訪れたのですが、さらに衰退が進んでいる印象を受けたのが一番ショックな出来事でした。以前も住民が少なく寂しく感じましたが、去年感動した池の周りの大きな風車とバレーボールコートが使われていないことが一目瞭然でした。しかし、少ない人ながらも人柄は変わらずにあたたかく、犬や猫、にわとりなどの動物と共にのんびり暮らしている様子が分かって安心しました。

また、天候は去年より安定しているように感じました。業務中にスコールに見舞われ、雨宿りに走ることなく業務に集中できました(写真 5)。しかし、午後は天気がかげることが多く、去年は恒例だった業務後のバレーボールができなくてとても残念でした。夕陽も全員で見ることができず、心残りとなってしまいました。昼間は青空が多く、遺跡が映えるため綺麗な景色を楽しむことができ、休日にトンレサップ



写真 5. いい天気のおフィス

湖を訪れた時には去年行けなかったところまでボートを進めることができました(写真 6)。

2 度目のカンボジア訪問で去年と同様に何度も感じたのは人々のあたたかさです。気さくで、スタッフ、村に住む人々、マーケットの店員さんなど、ほとんどの人が、目が合うだけで微笑んでくれてとてもあたたかい気持ちになりました。アンコール地域から少し離れた村を訪れた時、垣根がある家もあるけど、基本オープンで子どもたちが行き来して遊んでいるため、どれが誰の家か分からなくなっていました。セキュリティやプライバシーが求められる日本とは大きく違って驚きましたが、のびのびと遊ぶ子どもたちが羨ましく思いまし

た。そのような生活があたたかい人柄を生み出すのだと感じ、観光客へのサービスが重要である観光都市であるからというだけの理由ではないと考えました。今年の3月に北陸新幹線が開業し、多くの観光客が訪れていますが、金沢も見習うべきところがたくさんありました。

2週間、とても刺激的な時間を過ごすことができました。学生が過ごしやすいうように動くチューターが体調をくずしてしま

って半日休みをいただけてしまい、反省点もありますが、2週間全員が安全に健康に過ごし、無事に帰って来ることができて本当に良かったです。もう会えないと思っていたスタッフの方々に会えたことが一番嬉しかったです。またカンボジアに戻って来ることができるように、これからも様々なことに興味を持って動いていきます。塚脇先生をはじめ、たくさんの方々に教えていただいた友達のような APSARA スタッフの皆さん、副総裁のプウさん、そして毎日笑顔で私たちを癒やしてくれた運転手のペンさんには感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。



写真 6. トンレサップ湖

2) チューター視点でのカンボジア

金沢大学人間社会学域国際学類 4年 長谷川美華

今年はチューターとしてアプサラ機構でのインターンシップに参加させていただきました。昨年のチューターのように上手く学生たちのサポートができるか不安でしたが、今年度の参加学生たちは業務にも観光にも積極的で、こちらから去年のことを伝えるだけでなく、新しく彼らから教えてもらうことも多く去年とはまた違った刺激のある 2 週間を過ごすことができました。

チューターの仕事は昨年と変わらず学生たちのその日の予定や体調を確認することでした(写真1)。各グループが、公団の誰とどこに行くのか、何時に帰ってくるのかを業務前か業務後に確認し、変更があった場合は携帯で連絡をしてもらい先生に報告していました。去年との大きな違いは小牧短期大学から学生 2 人と木村先生が加わったことと、チューターが 2 人になったことです(写真2)。そのため、学生は女子 8 人、男子 4 人になったので、心なしか昨年より男子が元気で積極的だったように感じました。また、チューターが 2 人いることでひとりの負担が減っただけでなく、現地業務やオフィス待機、木村先生のバリアフリー調査同行など分かれて行動することができ、学生により近い位置で動くことができました。業務としては、去年はグループごとの行動よりも全体で動くことが多かったのに対して、今年度はグループで分かれて現地業務を行っていました。ですので、去年は浅く広くたくさんのことを学びましたが、今年度は自分たちの担当業務について理解をより深められたのではないかな、と思います。

この 2 週間、私はバイクの数が余った時には学生に同行、それ以外はオフィス待機をしていました。同行できたのは西バライプロジェクトのグループのみで、残念ながら去年の担当業務だった北バライに行くことはできませんでしたが、去年も何度か西バライ周辺に連れて行っていただいていたので、去年との違いを見つけることができました。一番驚いたの



写真1. 初ミーティング



写真2. チューターふたり

は西バライ中央の West Mebon を保護する土手の上に小さな小屋ができていたことです（写真 3）。ここには West Mebon の修復プロジェクトについての紹介があり、写真つきでクメール語・英語・フランス語の説明が書かれていました。去年は口頭のみでなかなか理解するのが難しく、深掘できませんでしたが、今年はこの資料のおかげで理解しやすく、より詳しく学べたのではないかと思います。



写真 3. 西バライの小屋

この小屋については最終日のバーベキューの際に副総裁のプウさんともお話をさせていただいて、観光客誘致のために作ったということを知りました。しかし、去年も今年も西バライ周辺で観光客をほとんど見かけず、日本のガイドブックにも西バライには専門家やよほど興味がある人でないと行かないと書かれており、観光客を集めるには西バライへのアクセス方法などまだまだ改善が必要なのかなと思いました。寺院の修復については残念ながら、雨天のためかビニールシートがかけられており、どれくらい進んだかを見ることはできませんでした。ただ、去年は West Mebon までボートで行き、今年はバイクで西バライを突っ切っていくことができたのでとても貴重な経験でした。

オフィス待機の時はディスカッションする様子を撮ったり、同じくチューターの河本さんや先生と話をしたりすることが多かったのですが、1 日だけ待機していた時に去年の北バライ担当の方がずっと話し相手をしてくださいました。といっても話した内容はとても真面目なことで、日本とカンボジアの大学の違いや携帯電話の契約システムの違い、東日本大震災の津波や福島原発の話などでした。ディスカッションをしているようで非常に楽しい時間でしたが、自分の知識の少なさや語彙力の低さを改めて感じ、もっとニュースや新聞を見たり、英語の勉強をしっかりしたりしようと思いました。

他にも木村先生のバリアフリー調査に同行させていただいたのは貴重な経験でした。去年は貯水池など水資源の保存と遺跡整備の関連性や遺跡それぞれにまつわる歴史や神話にばかり意識が向いていたので、身体障害者や高齢者向けにどこを改善していくか考えるのは新鮮で興味深かったです。また、遺跡内での注意事項の日本語訳修正もお手伝いさせていただきました。原本はほぼ英語を直訳したものだったので違和感を覚える文章になっており、私も卒業論文を書く際には不自然でない英語を書くように心がけようと感じました。

業務以外では食事の場所や休日の予定についてみんなの希望をまとめていました。とはいえ、今年の学生たちはそれぞれやりたいことが決まっていたのでこちらから提案する必要は全くなく、逆に新しいお店の話などを聞くことができました。また、食事の場所についても全員一緒に食べるというよりは各自で色々なお店を開拓していました。中にはローカルレストランや屋台に挑戦する学生もいて、食中毒にならないか心配になりました。

業務後には昨年と同じく孤児院を訪問しました。天気はあいにくの雨天のため外で遊ぶことはできませんでしたが、屋根のある遊技場で折り紙や風船、シャボン玉、縄跳びなどで元気に遊んでいました。昨年いた子たちにも会えましたが、全体的に人数は減っているようだったのでいい傾向だと感じました。業務後の活動で一つだけ残念だったことは、夕方のスクールが多く公団の方とバレーボールが一度もできなかったことでした。しかしその分業務と夕食の間にしっかり休養を取ったり、ホテル周辺を散策したりすることができました。

今年のインターンシップ中は特に大きなトラブルもなく楽しく 2 週間過ごすことができました。唯一のトラブルと反省点は 2 週間目にチューターが 2 人ともダウンしたことです。幸いなことに休むタイミングはずれていたもので、どちらかがひとりでチューター業務をこなすだけで済みましたが、2 回目ということで少し気がゆるんでいたのかなと反省しました。

また、昨年新しいオフィスに移ってからまだ 2 度目のインターンシップということで、昨年と異なる部分が多々あったり担当してくださる公団の方々の顔ぶれが変わっていたりと私自身戸惑うことや緊張することも多かったように感じます。それでも昨年とまた違った楽しさがあり、最後の公団の方々や運転手のペンさんとお別れするときはとても寂しかったです。次にカンボジアに行くのは卒業後か、旅行か、出張かまだわかりませんが、昨年と合わせて 4 週間の滞在で教えていただいたことを周りに伝えていこうと思っています。

最後に、チューターとして再びこのプログラムに参加する機会をくださった塚脇先生や、サポートをしてくださった事務の方々、カンボジアでお世話になった公団の方々や運転手のペンさん、他大学の先生方に感謝しています。この報告書がこれからのインターンシップに役立てば幸いです。

6. 埼玉大学の海外フィールド実習報告

1) 埼玉大学の海外フィールド実習

埼玉大学教育学部・准教授 荒木祐二

金沢大学の海外インターンシップに参加するのは今回で4回目となる。金沢大学の取組みにならって、埼玉大学でもいずれは同様のインターンシップ、あるいはフィールドスタディを実現させたいと考えている。この度は、埼玉大学教育学部の学生3名が同行し、金沢大学のインターンシップのサポートを兼ねた海外フィールド実習（滋賀県立大学チームとの合同実習）を実施した。以下に、本年度の活動を振り返る。

筆者らが合流したのは、インターンシップ業務の2週目だった。金沢大学と今年度から参加の小松短期大学の学生たちは業務にすっかり順応していて、公団職員たちとの打合わせを段取りよく済ませ、バイクの後ろに乗って颯爽と現場へ向かっていった。わずか1週間の業務を経験しただけですでに公団職員らと打ち解け、主体的に活動に取り組んでいる様子から、学生たちの目的意識の高さがうかがえた。渡航前の意識の高さと現地到着後の現場経験が奏功したのだろう。

一方で、チューターの活躍は、本年度も参加学生の安全確保に欠かせなかった。チューターを務めた河本麻実さんと長谷川美華さんは、昨年のインターンシップに参加した経験を生かして、初めてカンボジアを訪れた学生たちの多様な要求を見事にさばっていた。ふたりの誠実な対応により、学生たちの心理的負担は大いに和らいだことだろう。また、チューターとしてかかわったことで、ふたりとも昨年と違った視点からインターンシップを客観的に捉えることができ、公団の業務の本質などについて深く考えていたようにみえた。

本インターンシップの傍ら、埼玉大学チームは、トンレサップ湖やアンコール遺跡内の森林・水圏環境におけるフィールド実習（写真1, 2）、およびレン・タ・エクのほかシェムリアップ市内における小中学校や住民生活の見学を実施した（写真3）。トンレサップ湖の見学には全4大学の教員と学生が同行し、この場所を研究フィー



写真1. トンレサップ湖の見学



写真2. ハス栽培地でのフィールド実習

ルドとする筆者から、植生や樹木の生態について説明させていただいた。トンレサップ湖は、雨季と乾季で景観が劇的に変化する世界的にも稀有な自然環境であり、そのメカニズムにかかわる話は興味深く聞いていただけたと思う。滋賀県立大学の堂満氏（水圏環境が専門の一つ）からは、刺激的な質問やコメントをいくつも受け、トンレサップ湖が研究対象として貴重な存在であることを改めて認識させられた。



写真3. ルン・タ・エクの学校見学

参加した学生たちにとっては、住民の暮らしや学校の訪問が強く印象に残っている様子であった。突然の訪問にもかかわらず、躊躇いなく家に招いてくださるカンボジアの方々の大らかさや、ものが十分になくても朗らかに笑う子どもたちの姿を目の当たりにして、学生たちは自分たちの生活を根本から見直していたようである。

本フィールド実習はまだ試行錯誤の段階にあり、いくつかの課題を抱えている。例えば、教育施設の訪問を試みるも、学校の長期休暇にあたり、残念ながら子どもたちと接することができなかった。また、森林や水圏環境での実習についても、専門性がより深まるような手立てや工程などの改善が必要と内省している。加えて、渡航前に4回の渡航説明会を開催し、3回目までは4名の学生が参加するはずであったが、渡航直前になって1名の教育実習期間が想定以上に早まり、やむなく参加を辞退することになった。今後は、こうした課題への対策を講じつつ、教育と研究の発展を見据えた海外フィールド実習のあり方を検討していきたい。

インターンシップは本年度で6年目となり、参加大学も増え、事前準備から実施、予期せぬ事態への対処に至るまでの一連の工程が確立し、活動全体が醸成されてきたように見える。公団職員たちも、毎年の恒例行事として参加学生たちを快く受け入れ、回を重ねるごとに頼もしくなっている。インターンシップ参加者と公団職員との交流会（写真4）においては、互いの絆がより強まったことを感じつつ、埼玉大学



写真3. 公団職員との交流会

の存在が公団側にさらに認知されているのを感じた。今後も、学生たちの成長を後押しする本活動にかかわらせていただき、同時期に再又大学のフィールド実習を継続していけることを願っている。末筆ながら、この度の渡航でお世話になった塚脇氏、公団副総裁の Hang Peou 氏、公団職員たち、その他ご支援いただいた関係各位に心より感謝申し上げます。

2) 海外フィールド実習から学んだこと

埼玉大学教育学部学校教育教員養成課程 3年 山村瑞穂

私はこの海外フィールド実習を数か月前から楽しみにしていた。なぜかという、実際に行ったことのある荒木先生や先輩方から話を伺って楽しそうだったからである。また、行きたいと思った国に実際に行くことを決心したのは初めてだったからである。

アンコールワットはずっと見たかった遺跡の一つである。遺跡自体はとても大きく、迫力があつた。対照的に、壁や柱には細かい彫刻が施されていた(写真1)。その彫刻の中で、三体の神様というのが興味深かつた。ブラフマー神、シヴァ神、ヴィシュヌ神がおり、それぞれ創造、破壊、繁栄を司る神とされている。このように、彫刻にも意味、物語があり、見ていて飽きなかつた。私はもともと歴史が苦手



写真1. アンコールワット内部の壁面

であつたが、このように実物を見てからだと興味もわくのだと思う。また、それら遺跡の修復には日本人が多く関わっている。石一つ一つにナンバリングをし(写真2)、なるべく以前の状態しようとしているところが日本人らしいと思つた。時間はかかるが着実に修復されていた。

カンボジアでの人々の暮らしも考えるところがたくさんあつた。トンレサップ湖にいる人々は湖の上で揺れながら暮らしていた。私たちからすると環境に不便さを感じるが、ここに住んでいる人たちにとってはこれが日常であり、不便とも思わないのだと思う。実際に、楽しそうに遊んでいる子どもや、家族そろって赤ちゃんをあやしている様子などが見られた。



写真2. ナンバリングされている石

コンポンプルック集落では、高床式の住居を見ることができた(写真3)。高床式というと歴史の教科書で見るとような1~2mの高さの住居ではなく、高さ6m以上と想像をはるかに超えていた。実際に家に入らせてもらうと、床は竹でできており、下を見ると竹の隙間から地面が見えた。大人数で登つたので床が抜けるのではないかと心配だったが、何とか無事に視察することができた。急に押しかけたにもかかわらず、この家の住人たちは私たちを快く受け入れてくださった。これがもし日本ならば、10人近い他国からの観光客にいきな

り家を見せてほしいと言われて快く受け入れられたらどうか。

カンボジアで生活する人々は、シャイな人も多いが、このようにみんな優しい人たちばかりだった。こちらに来てからは、日本がどれだけ忙しく時間に厳しい国であるか実感させられた。確かにそれも大事だが、このゆったりとした雰囲気が、私はとても好きになった。英語もうまく話せず、思っていることを伝えるのにとっても苦労

したが、笑顔で一生懸命話していれば相手もそれに応じた反応をしてくれるのだと思った。次にまた来る時までには、現地の言葉も少し勉強してから行きたいと思う。

さて、今回のフィールドワークの中で数回、金沢大学インターンシップに参加する学生たちともお話することができた。みなさんは初対面でも笑顔で積極的に話しかけてくださった。また、お話を聞いていると外国に興味を持ち、色々な国に行っている方が多かった。このような積極性は見習わなければならないと思った。さらに、勤務中は各自の仕事に集中して取り組んでおり、昼と夜の活動のめりはりがとてもよくついていた。交友を深められただけでなく、大いに刺激された数日間であった。

今回のフィールドワークでは埼玉大学の他に滋賀県立大学の方々、金沢大学の高井さんともご一緒した（写真 4）。遺跡や集落を見ているときもメモをよく取り、疑問も数多く持ちながら見ていた姿が印象的だった。彼女たちがいてくださったおかげで、ただ遺跡や集落を見るのではなく、議論をしたり、感想を言い合ったりしながら見る事ができたのだと思う。

最後に、今回のフィールドワークにおいては、本当にたくさんの先生方にお世話になった。塚脇先生をはじめ、引率をしてくださった堂満先生、吉野先生、そして何より今回のこのフィールドワークに行く機会を与えてくださった荒木先生に感謝している。このように、カンボジアの歴史、遺跡、環境、生活に触れ、たくさんのことを学んだ。しかし、わたしは何より他の国に対する興味がぐんとあがり、この目で見たいという気持ちが高まった。カンボジアで得た経験が、これからの活動のあらゆる原点になるだろうと思っている。



写真 3. コンポンブルックの子どもたちと



写真 4. 滋賀県立大学のみなさんたちと

3) カンボジアでの体験を終えて

埼玉大学教育学部学校教育教員養成課程 2年 山内 ^{はるか}悠

今回、私は8月29日から9月5日までの約一週間、金沢大学のアンコール遺跡整備公園インターンシップに同行させていただきました。今回のカンボジア渡航に参加した理由は、大学の先輩が2年前に同じようにカンボジアに行って多くのことを学びカンボジアでしかない貴重な経験をした話を聞き、是非私も行ってみたいと思っていたからです。また、私は今までに海外には一度しか行ったことがなく、それも旅行で行ったので、旅行という形ではなく海外での生活を体験してみたいと思ったのも参加した理由の一つです。

現地ではアンコールワットやアンコールトムなどの遺跡見学やトンレサップ湖の視察、現地の家を訪問させていただき、インタビューをするなどの活動をしました(写真1)。渡航前までに私が抱いていたカンボジアのイメージは地雷がたくさん埋まっていて、人々はとても貧しく辛い生活を送っている国だということでした。しかし、実際にカンボジアに行ってみてそうではないことがわかりました。カンボジア



写真1. アンコールワットにて

は衛生面では安心できる部分とそうでない部分があったけれど、安全面では私が想像していたよりも平和な国だと思いました。また、現地の人々は貧しいながらもとても楽しそうに生活していました。カンボジアに住む人々は常に笑顔に溢れ、私達のことを歓迎してくれました。その国の裕福さがそこに住む人々の幸せさと繋がらないことを学ぶことができました。

カンボジアでは学校にはほとんどの子供が行くことができないだろうと思っていたけれど、半日の授業ではありながらも無償で子供たちは学校に通うことができていることを私は初めて知りました。その学校で学ぶ子供たちの姿を実際に見ることはできなかったのですが、実際の学校を見学し生徒が勉強している環境を見せていただくことができ、カンボジアの子供たちも学校教育を受けることができていることを知り、嬉しく思いました(写真2)。



写真2. 現地の子供たち

トンレサップ湖をボートで移動した際は、想像していたよりもはるかに大きな湖でとても驚きました(写真3)。日本の面積の半分ほどしかないカンボジアにまるで海のようにどこまでいったら陸が見えるかわからないような広さの湖が存在することが信じられませんでした。日ごとに水位が大幅に変わる湖で日本では見たことのない「湖上住居」に住む人々も見ることができました。私には自分がここで暮らして



写真3. 金沢大学の学生たちと

ていくのはとても想像できませんが、現地の人々にとっては当たり前のことなんだなと思ひ、日本では知ることができない価値観に触れることができました。

コンポンプルック集落の高床式の住居を見に行った時は、今までにテレビでも見たことのないような独特な景色が目の前に広がっていて釘付けになりました(写真4)。

今回訪問した際は例年よりも水位が低かったようで船を降りて住居の中を見学させていただくことができました。高床式の住居の中は床がとても不安定になっていて、いつ穴があいてもおかしくない状態でした。ここでも日本では触れ合えない、カンボジア特有の生活に出会えて良い経験になりました。



写真4. 高床式住居

今回の渡航ではカンボジアに実際に行くことによって初めて知ることが多く、テレビなどから得た情報だけではその国の正しいことを学ぶことはできないとわかりました。実際にその国を訪れ、自分で見て聞いて体験してはじめて国際理解ができるのだと思いました。私は大学生のうちこのような貴重な経験ができたことを本当に幸せに思います。将来、私が学校教員になったときに実際に生徒達がカンボジアの様子を見る機会はありませんと思うので、私が今回の体験のことを生徒達に伝えていきたいと思いました。

最初は、現地の人と上手くコミュニケーションがとれるか、文化の違い、慣れない土地での生活など、不安が大きかったのですが、同行していただいた荒木先生、現地でお世話になった塚脇先生のおかげで安心してカンボジアでの1週間を過ごすことができました。今回のカンボジアでの経験は私にとってとても貴重なものになりました。この経験を今後の人生の糧にしていき、またこのような機会があれば積極的に参加していき自分の知らない世界を広げていきたいと思いました。

4) カンボジア海外フィールド実習

埼玉大学教育学部学校教育教員養成課程 2年 山崎郁実

私は、8月29日から9月4日までの7日間、アンコール遺跡やトンレサップ湖の自然、学校などの視察や現地の人々との触れ合いを通して、カンボジアの風土に触れることを目的としたカンボジア海外フィールド実習へ参加させていただいた。カンボジアは以前から興味があり行きたいと思っていた国であった。大学に入学し、荒木先生に初めてお会いしお話ししたとき、フィールド実習の存在を知り、自分も是非参加したいと思った。その後も先生からカンボジアについてのお話を聞く度に、カンボジアへ行きたいという思いが強くなっていった。そして今年の春、先生からお誘いをいただき、今回の渡航へと至った。

私にとって今回の渡航が初めての海外、初めての飛行機と、わからないことだらけであり英語もほとんど話すことができない状態であったが、不安な気持ちはほとんどなかった。不安よりも先生に同行させていただけるということで普通の観光では行けない場所に行け、できない経験ができるに違いないと思い、期待に胸を膨らませていた。

現地での7日間はとても濃く充実した時間を過ごすことができた。カンボジアでは、主にアンコール遺跡やトンレサップ湖の視察、市場の見学などを行った。また、同行させていただいた金沢大学のインターンシップの様子も見せていただくことができた。インターンシップに直接関わることは少なかったが、制服を着て業務に向かう学生の皆さんはとても生き生きとしていて格好良く、刺激を受けた。7日間を過ごし抱いたカンボジアという国の印象としては、「のんびりとした国」「笑顔の多い国」である。カンボジアでは多くの笑顔を目にすることができた。



写真1. 水上住宅の見学

印象に残っている出来事の一つとして、コンポンブルック集落の視察がある。この集落は湖の中にあるため、船で移動して訪れた(写真1)。水位が変化する場所にあるため、高床式住居の集落であり、日本では見たことのない建築様式であった。また、この集落では実際に家の中まで入れさせてもらい、そこに住む人々の生活の様子を間近で見ることができた。日本とは全く違うものであり、とても興味深かった。住民の人々との交流をする中で、1人の女の子と出会った(写真2)。この女の子は8歳で、習い始めたばかりの英語で私に話しかけてくれ、私もたどたどしい英語で会話することができた。女の子は、とても笑顔で一生懸命話しかけてくれ、私も自然と笑顔になった。カンボジアの人々は、国や人種が異なる私たちに対しても警戒心を持つことなく笑いかけてくれる素敵な人々ばかりであった(写

真 3)。日本では知らない人に出会ったら多くの人は警戒心をもって接するであろう。人の人とのコミュニケーションが希薄になってしまっていると言われる日本にはないものがカンボジアにはあるような気がした。また、日本での時間に追われる生活とは違い、カンボジアでの時間の流れはゆったりとしていて、自分の日本での暮らしを改めて考えさせられた。

また、ルン・タ・エクという村への訪問もとても印象深い。この村は、エコビレッジというエコに配慮した村づくりとして新しく作られた村である。訪れてみて、第一に感じたことは活気がないということだ。建物は全体的に見ても綺麗で丈夫そうなものが多いのだが、人があまり見当たらず、店などもなかった。その理由は、ルン・タ・エクは郊外にあり、車やバイクで1時間と、町から遠く離れてしまっているので生活に不便な部分があるので、移住者が少ないからだという。村の住民に話を聞いたところ、アプサラ公団の勧めで8ヶ月前に夫婦でルン・タ・エクに移り住み、自給自足の生活をしていて、子どもたちは勉強のため町へ住んでおり、1週間に一度ほどしか会えないと言っていた。肉などの食料や物資は町へでないと購入できないため大変そうである。このような現状を変えることができれば移住者も増え、活気が出るのではないかと思う。インフラ整備や物資輸送システムの改善というこの村やカンボジアの課題が今後どうなっていくのか気になる。

また、カンボジアは「遺跡の国」でもある。世界遺産に登録されているアンコール遺跡は以前から自分の目で見たいと思っていた遺跡であり、目にしたときはとても感動した(写真4)。遺跡は長年放置されていたが、人によって発見され、人の手によって修復され、現在のような立派なものになっている。その修復には日本も協力していて、日本の高い技術が活用されているということも知ることができた。修復する際、新しく手を加えた部分はわざと色を変えることで本来の姿がわかるようにするという工夫や、岩をひとつひとつナンバリングし修復するという作業は時間がかかり、気が遠くなりそうであると感じたが、重要な遺跡を最高の形で修復するためには欠かすことのできないことなのだと思った。遺跡は現在

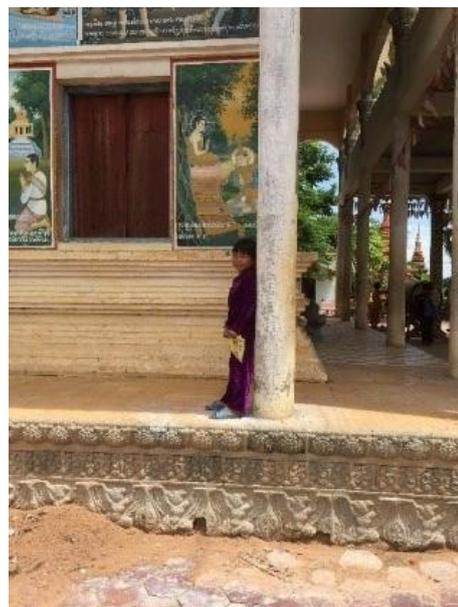


写真2. コンポンブルック村の女の子



写真3. コンポンブルック村の子どもたちと

も修復中であり、日本だけではなく多くの国や団体、それに関わる多くの人々によって修復が行われている。このように日本の技術力を活かした国際協力はとても重要なことであると思う。そのため、日本の高い技術力はこれからも維持促進してゆくべきである。自分が大学で専攻している技術科教育には大きな意味があり、更に力を入れていきたいと感じた。また、国際協力にはいろいろな形があるが、自分にできる国際協力をみつけ実践していきたいと思った。

今回のカンボジア海外フィールド実習では学ぶこと、感じるものがたくさんあった。これらを忘れずに今後に役立てていきたい。今回の渡航では貴重な経験ができ、自分が恵まれている環境にいるということを実感した。出会った方々や共に行動した方々、お世話になった先生方に心から感謝し、その気持ちも忘れずにいたい。



写真 4. プラッカーン遺跡の木の下で

7. 滋賀県立大学の海外フィールド実習報告

1) 海外インターンシップと海外フィールド実習を間近に見て

滋賀県立大学環境科学部・准教授 堂満華子

今回、縁あって金沢大学の海外インターンシップにあわせて滋賀県立大学の海外フィールド実習を初めて実施した。私にとってはカンボジアを訪れるのも初めてであるばかりか、海外に学生を引率してフィールド実習をおこなうのも初めての経験である。そのため、滋賀県立大学の海外フィールド実習は、経験豊かな埼玉大学の荒木准教授が実施する海外フィールド実習に合流するという形態をとった。本報告では、金沢大学の海外インターンシップと埼玉大学の海外フィールド実習を間近に見て私なりに学んだことを述べる。

金沢大学の海外インターンシップにあわせて実施される埼玉大学の海外フィールド実習に合流することを最初に打診したのは4月上旬のことであった。その後、実際に出発するまでの期間は、金沢大学の海外インターンシップ説明会資料や荒木准教授作成の海外フィールド実習説明会資料をもとに準備を進めた。これらの資料は、実習内容について詳しく記されていることはもとより、日本で準備しておくべきことや現地での日々の暮らしにまで実に細やかな説明がなされていた。

とくに現地での暮らしについては、天候や服装、飲用水・食事などの日々のことに加え、危険な生物、病気、事故・事件などの安全面についてまで言及されていた。さらに渡航前には、ビザの取得方法や空港での乗り換えについてもオリジナルの資料が提供された。海外に不慣れな私にとってこれらの情報は有益であるばかりでなく安心感をもたらすものであった。インターンシップと海外フィールド実習に参加する学生もきっと同じように感じたことであろう。

また、埼玉大学と滋賀県立大学の渡航はインターンシップの最初の1週間が過ぎた8月29日であったため、インターンシップの第1週目の活動については、塚脇教授から毎日配信されるメールでそのようすを知ることができた。メールに添付された写真には学生の笑顔があふれ、実に生き生きと業務に励む姿がうつしだされていた。そのようすに、私が抱いていた漠然とした不安はしだいに解消され、実習への期待感がふくらむばかりであった。結果的にきわめてポジティブな気持ちで実習に入ることができたし、そのような心持ちが現地での活動に集中力をもたらしたように感じた。

私はこの経験を通じて、野外実習における事前準備の大切さを学んだ。実習が実り多いものとなるかどうかは、もちろん参加者である学生のモチベーションが大事ではあるが、そのモチベーションを引き出す



写真1. 全員で訪れたトンレサップ湖

ためには余計な不安があってはならない。塚脇教授と荒木准教授からもたらされる情報は常に的確であり、実習参加者への心配りにあふれている。金沢大学の海外インターンシップと埼玉大学の海外フィールド実習では、このような入念で手厚い準備が土台となって学生が実習活動に専念できる環境が整えられている。その準備にどれほどの時間と努力が費やされているのか、塚脇教授と荒木准教授にはただただ敬服するばかりである。滋賀県立大学でも野外実習を取り入れた授業は数多くある。両氏の取り組みを見習って今後の教育活動に活かしていきたい。

現地でも塚脇教授と荒木准教授の存在感が大きかった。両氏はともにカンボジアで長きにわたり研究活動をおこなっているため、同国の実情にたいへん詳しい。現地での活動は安全面・衛生面についても十分に配慮されており、体力的に無理のないスケジュールが組まれていた。おかげで旅先では体調を崩しやすい私でも最後まで日程をこなすことができたし、活動が2週間にわたるインターンシップの学生も最後まで元気よく活躍していた姿が印象的であった。



写真2. 浸水林について解説する荒木准教授

8月30日には全体でトンレサップ湖を見学し、食事をともにした（写真1, 2）。全体での行動はこれが最初で最後であったが、学生同士すぐに打ち解けあって交流していた（写真3）。専攻も学年も異なる他大学の学生との交流は互いによい刺激となり、実習の楽しさを倍増させていたようだ。野外実習を合同で実施したことによって活動内容がよりいっそう深まったことを実感した。野外実習を海外で実施するにあたり、複数教員による安全確保という意味だけではなく、学生への教育効果という面においても複数の大学による合同開催は有意義であると感じた。金沢大学と埼玉大学の取り組みを間近で見て、今後のフィールド教育のあり方についてたいへん勉強になった一週間であった。



写真3. プノムクロム近くの村にて

末筆ながら、このたびの実習でお世話になった塚脇教授と荒木准教授をはじめ、小松短期大学の木村准教授、東北大学の吉野教授、公団副総裁の Hang Peou 氏、公団職員様、その他ご支援いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

2) 学生生活最後の学び

滋賀県立大学環境科学部環境生態学科 4年 浅井裕里

私は現在4回生であり、学生生活は残り半年である。4回生になり就職活動と卒業研究を始め、学生の終わりがいよいよ現実的なものになってきた。自分自身の将来を考えるうちに、社会人になってからは学生のときほど趣味に没頭したり、友人と旅行に行ったりすることが難しくなると考えるようになった。また、当たり前のように先生がいて勉強をすることができるという環境がとても恵まれたものであると思うようになった。社会人に比べ学生は学びたいことを学び、やりたいことをやれる時間がある。その時間は残り少ないが無駄にしたいかと思わなかった。残された学生生活の間で、もっとあらゆるものに触れ自分の視野を広げたいと思った。そのようなことを考えているときに、金沢大学のアンコール遺跡整備公園インターンシップに参加しないかと声をかけられた。カンボジアで、自分とは異なる生活を送り、異なる文化や考えを持つ人々を知ることで、視野を広げたいと思った。実際にカンボジアに行き、予想以上に得られるものがあった。カンボジアで学び考えたことを生活面からと、遺跡・森林保全の面から述べる。

私はカンボジアに5日間滞在した。滞在中、埼玉大学の学生たちと共にトンレサップ湖、コンポンブルック村やアンコール遺跡群を視察した。トンレサップ湖では水上生活を、コンポンブルック村では高床式住居を見た(写真1)。決して裕福とはいえない現地の生活を視察し、自分の生活を客観的に見つめ直すことができた。ガスがこないため薪で火をおこしていたり、洗濯を川の水で行っていたり、生活排水を川に直接流したりしていた。生活水準の違いを改めて実感した。カンボジアに行く前から生活水準の違いを想定していたが、実際にそれらを目にすると日本の生活がとても贅沢で恵まれていることを実感した。



写真1. コンポンブルック村の高床式住居

また、現地の生活の視察で最も印象的であったことは、カンボジアの人々が時間を意識していないことである。日本では、どこにでも時計があり、電車やバスが時間通りに来る。私にとってスケジュール帳や腕時計は必需品である。今日の予定や明日の予定が決まっています、時間をどのように使うかを常に考えている。空いた時間や無駄に過ごした時間を勿体ないと思う。しかし、トンレサップ湖やコンポンブルック村、シェムリアップでは現地の人々は時間を気にせず、ゆったりとした生活を送っていた。昼間に家族でトランプをしていたり、木にハンモックを下げ休息をとったりしていた。時間に縛られず気持ちに余裕があるため

か、カンボジアの人々は皆優しく、笑顔で接してくれた。カンボジアの暮らしは日本に比べれば豊かとはいえないかもしれないが、心は豊かであるように感じた。いくら発展して豊かな暮らしを送っていても、時間に縛られ、人間関係にストレスを感じていては幸せとはいえない。何をもって幸せとするかは難しい話だが、カンボジアの人々の生活や人間性から、自分の生活を見直し幸せとは何かを考えさせられた。

アンコール遺跡群の視察ではアンコールトム、アンコールワット、タプローム、北バライなどを訪れた。どの遺跡でも細かな彫刻が施され、彫刻の意味することや当時の人々の思考は興味深いものであった（写真 2）。日本や中国など各国が遺跡の修復や管理、貯水に関してカンボジアに指導し力を貸していた。例えば、上智大学がアンコールワットの参道の修理を行っている。現地の人々に日本の技術を教えなが



写真 2. 遺跡の細かな彫刻

ら修理を行っているが、修理のやり方や意味を理解してもらうことは難しいようである。参道の修理では、ブロック状の石を紙一枚入らないくらいに敷き詰めるのだが、現地の人はそのまで時間をかけ丁寧に作業をすることを理解できないようである。長期的な目を見た利益よりも、早く完成するという短期的な利益を優先してしまうようである。

長期的な目を見た持続可能な利用というものは、遺跡保全に限らず森林保全でも課題となっているようであった。水上生活を視察したトンレサップ湖では、アオコの発生や外来種の流入が問題となっている。他に、浸水林の持続可能な利用も課題である。トンレサップ湖には木本類と草本類を含め 120 種の植物が生育している。それらは水に浸かっており浸水林といわれるものである。水上生活を送る人々は浸水林の木々を薪として利用していた。しかし、人々は使いたいだけ木を利用しているため浸水林を維持管理できていないようであった。トンレサップ湖でも現地の人々に持続可能な浸水林の利用を理解してもらうことが必要である。

高床式住居を視察したコンンプルック村にも浸水林があった。トンレサップ湖と違い、ここでは浸水林の管理を村の人々が自ら行っていた（写真 3）。コンンプルック村でも木々を薪として利用しているが、木々の利用についてルールを決め浸水林を守っていた。使ってもよい範囲を決め、その範囲内で木を切り、利用していた。遺跡の保全でも、トンレサップ



写真 3. 村で管理されている浸水林

湖の浸水林の利用でも、コンポンプルック村のように自ら持続可能な利用について考え、行動を起こすことができるようになることが大事である。先進国の私たちは教え、手を貸すことはできるが、それ以上のことはできない。最終的に重要なことはカンボジアの人々が教えられたことを自分たちなりに理解し、それを次世代へ伝えていくことであると思った。

カンボジアでそのように感じたことは、これから社会に出る私自身にも当てはまることである。学生時代に教えられたことや学んだことを、自分なりに理解し今後の行動に反映させることが大事である。教えられたことをどうするかは自分次第である。カンボジアで文化や生活の異なる人々と出会い、自分の考えの幅が広がった。また、金沢大学、小松短期大学と埼玉大学の学生さんと共に時間を過ごし、意欲的な姿勢やたくましさに刺激を受けた。これまでに見たことのない世界を見て、また、同年代ではあるが全く異なる人生を送ってきた学生さんと交流し、たくさんの刺激を受け自分の中の何かが変わった気がする。

このインターンシップは得られるものが多く、言葉ではうまく言い表せないほど実りあるものとなった。また、このようなすばらしい機会で私たち学生が安全な環境で学び、過ごせたのは、お世話になった先生方のおかげである。カンボジアで学んだことを今後の活動でも忘れず何らかの形で活かしていきたい。今後に関わり成長した姿を見せることで、お世話になった先生方に感謝の気持ちを示したいと思う。

3) カンボジアを訪問して

滋賀県立大学環境科学部環境生態学科 4年 大崎亜見

今年で4回生になり、学生生活も残り半年と終わりが見え始めていた。就職活動や卒業研究に取り組むなかで、学生の中にしかできることはないかと考えていた。社会人になればこれまで吸収してきたことを今度は自分が社会に還元する立場になる。残された学生生活の間に多くのことを経験したいと思っていたとき、今回のインターンシップのお話をいただいた。これまでに何度か海外へ行ったことはあったが、どれも旅行だったので“学ぶ”ことを目的として海外へ行くのは今回が初めてであった。このような好機はもうないと思い参加を決めた。

この度、金沢大学のアンコール遺跡整備公団インターンシップに海外野外実習として1週間参加させていただいた。短い期間ではあったが、その中で私が実際に見聞して感じたこと、学んだことを以下に振り返る。

現地では埼玉大学の学生とともにチョンクネアの水上市集落やトンレサップ湖、コンポンブルック村、アンコール遺跡群などを視察した。チョンクネアの集落では、水上生活の様子をみることができた。水上に家が立ち並び、学校や教会もあった。ハンモックで昼寝をしたり、家族で食事を囲んでいたり、川で洗濯をしたり、子どもがボートで器用に移動したりしていた。日本では見ることのない光景でとても印象的であった(写真1)。



写真1. チョンクネアの水上市住宅

トンレサップ湖は、乾季と雨季で大きく形が変わる湖である。乾季には琵琶湖の5倍、雨季には20倍の面積になる、と聞いただけではまったく想像がつかなかったが、雨季のトンレサップ湖を目の当たりにして、スケールの違いを実感した。壮大な景色はまるで海のようなだった。水は茶色く、よくみる海や湖とは大きく違った。茶色い水がきれいな水質であるときいてとても驚いた。水深が3.6mと浅かったために湖底の泥が波によってまいあがり、茶色く見えていたのだ。

コンポンブルック村では高床式住居を視察した。ある家の台所や寝室に入らせてもらい、現地の人々の実生活をみることができた(写真2)。村を歩いていると、ここでも家族でトランプをして遊んだり食事をしたりしていた。私たちが家の前を歩いても嫌な顔をすることなく、笑顔で手を振りあいさつをしてくれた。カンボジアの人たちの人柄の良さを感じると同時に、自分の生活や行動を省みるきっかけとなった。

アンコール遺跡群では、アンコールトム
のバイヨン、タプローム、北バライ、アン
コールワットなどを訪れた。日本でアンコ
ールワットと聞くと、有名な世界遺産、観
光スポットというイメージが浮かぶ。しか
し実際は、アンコールワットは遺跡の一部
にすぎず、約 800 もの建造物があり、また
アンコール世界遺産に、10 万人以上の
人々が暮らしているというめずらしい特
徴をもつことを知った。遺跡の彫刻はどれ



写真 2. コンポンブルック村の家の台所

も細やかで、それぞれの絵や偶像がもつ意味はとても興味深かった。遺跡の土台には軽くて丈夫で風化しにくいラテライトを使用し、彫刻には加工しやすい砂岩を利用するといった工夫がなされていた。当時の文明を考えるとこれらのような建造物がどのようにして造られたのかとても不思議であった。また宗教が仏教からヒンズー教に変わったことにより、遺跡に掘られたブッダの顔がきれいに削り取られていたところも興味深かった。

アンコール遺跡群の修復や保全には、日本をはじめ中国などの各国が関わっていた。アンコールワットの石橋の修復には上智大学が取り組んでいた。石材と石材の間に紙一枚入らないように修復したいのだが、現地の人々にその緻密な作業を理解してもらうことが難しいとのことだった。

北バライではこれまでに見たことのない衝撃的な景色をみた。広大な湿地の中に立ち枯れた木が多く存在していた（写真 3）。北バライは元貯水池であったが、盛り土が崩壊し水が干上がったことで森林が形成された。しかし森林が形成されたまま水を入れてしまったために木が腐ってしまった。



写真 3. 北バライ

この一週間、私は気候や風土の違いはもちろん、時間の流れ、物事の考え方の違いを感じた。日本では考えられないことだと思うが、カンボジアの人たちは時間に縛られることなく毎日を過ごしていた。日本にいと分刻みで時間が過ぎ、人々はせわしなく心に余裕がないようにみえる。しかし今回訪問した村の人々、シェムリアップ市内の人々の生活は、昼間に家族でトランプをしたり、木にハンモックを吊るして昼寝をしたり、ゆったりと 1 日を過ごしていた。それが直接的な理由かはわからないが、現地の人々は寛大で優しかった。一方で、発展途上国だと思ってしまうようなところもあった。平日、子どもが生活のために観光客に物を売ってお金をせがむ光景をよく目にした。川の水で体を洗い洗濯をするなど、

きれいな水質とは思えない水を生活用水に利用していた。またゴミを捨てるという概念がないため、道のあらゆるところに食べかすや袋などが散乱していた。郊外はいまだにインフラも整っておらず、現地の生活は厳しいように感じた。しかし、現地の人々の笑顔をみると、ただ貧しくつらい毎日を送っているわけではないのだと感じた。

今回の渡航を通して、私がカンボジアという国に対していかに無知識であったかを痛感させられた。実際に自分の目でみることの大切さを学ぶとともに、この先もあらゆることに挑戦し、自分の可能性を広げていきたいと思う。

最後に、この度の渡航を全面的に支援して下さいました堂満先生をはじめ、金沢大学の塚脇先生、埼玉大学の荒木先生には大変お世話になった。またこの実習に参加した学生のみなさんとともに多くを学べたことはとても貴重な経験となった。心より感謝申し上げます。

8. 寄稿

シェムリアップの伝統住居の視察とアンコールワット遺跡整備公団 インターンシップ参加者との交流を通しての雑感

東北大学総長特命教授 吉野 博

1. はじめに

この度、金沢大学の塚脇真二教授の計らいで、2015年8月に同大学が主催したアンコールワット遺跡整備公団インターンシップの実施期間中に、2日間の短い期間ではあったが学生の方々と同行する機会を得た。現地のシェムリアップの伝統的な住居の見学やインターンシップ参加者との交流を通して貴重な機会を得ることができたので、それまでの経緯を含めてここに雑感として報告する。

2. 参加に至るまでの経緯

筆者は、2012年3月に東北大学（工学研究科都市・建築学専攻）を定年退職したが、昨年4月からは東北大学の総長特命教授として全学教育に携わっている。筆者の専門分野は建築環境工学であり、住まいと人と環境との関係について長年にわたって調査研究を進めてきた。健康で快適な住居をできる限り少ないエネルギーでどのようにして住宅を設計・運用すればよいかということがライフワークであるが、民家の伝統的技術を現代建築に適用する手法についての研究はその一つである。その関連で環境と共生した世界各地の住居について興味を持っており、例えば中国の地中建築に関しては現地でヤオトン視察し、一方で大学のキャンパスに地中に半分埋もれた住居を建設して室内の環境を測定し、環境評価を行ってきた。東南アジアの蒸暑地域では高床式住居や水上住居が多くみられ、以前からそれらの住居の環境やエネルギー使用に関して興味を持っていた。

ところで筆者は昨年6月から日本学術会議が事務局を務めるアジア学術会議の事務局長に就任し、今年の5月にカンボジアのシェムリアップで開催された年次大会の企画などを担当することになった。会議のテーマは、「文化のための科学技術 (Science and Technology for Culture)」であるが、その中のワークショップとして、「未来に向けたカンボジアの遺産の維持と生態系環境 (Cambodian Heritage and Preservation and Environment of Ecosystem toward the Future)」というテーマで議論することが検討された。会議の議長であるカンボジア工科大学の Om Romny 教授との打ち合わせの中で、スピーカーの一人として金沢大学の塚脇真二教授が推薦された。そこで2月末に参加の依頼を兼ねて同教授と金沢で面談したが、シェムリアップの住居に関して興味があるということ話を話したところ、会議の開催時に案内して下さるという申し出をいただいた。

5月の大会直前に、塚脇教授の案内でコンポンルック村、ルンタエク村、プラダック村、クメールハビタットを見学する機会を得たが、特に地上8m以上の高さに住居が川の両側

に設けられているコンポンプルック村の印象は強烈であった。見学の後で塚脇教授からは雨季の水かさが増している 8 月にインターンシップが実施されるので、その際に再度、視察されたらどうかとの誘いがあり、インターンシップそのものにも興味があったので、今回の参加を決めたという次第である。

3. シェムリアップの住居の環境的な特徴

(1) 高床式の住居

カンボジアの訪問は今回が 3 回目となる。最初の訪問時では高床式の住居を外部から観察しただけであったが、2 回目には、塚脇教授の案内で内部も見学することができた。高床式の住居がこの地で普及している理由は虫よけということもあるが、床下の空間を日常生活のために利用することであるという話を聞いて納得した。床下の空間は強い日射しが建物で遮蔽されているとともに冷えた土に接していることから、涼しい環境となっている。土の表面温度が夏は外気温よりも低く保たれているのは大地の熱容量によるものである。見学の際にその床下の空間で幼児がハンモックですやすやすと寝ていたが、その様子が実に印象的であった。

高床式の建物の中には、大きな庇を設けて日陰の空間を広く確保している家も多くみられ、それが住居形態の特徴の一つとなっている。

(2) 水上に建設されたコンポンプルック村の高床式住居

コンポンプルック村の視察は 2 回目になる。村の中央を流れる川の水位は雨季に入ったとはいうものの必ずしも高くはなかった。水位が最も高いときに 9 m 位になるであろうという場所で、その時は 3 m 位であった。水位が最高になれば床面近くまで水面が達し、川を利用した生活が日常になるのであろう。水面からは水が蒸発し熱が奪われるのでその近くの空気は冷やされる。水面が住居に近づけばそれだけ室内の環境も冷やされよう。

水位が高くなかったとはいうものの、前回の訪問時の水が殆どなかった時とは異なり、川の水を利用した洗濯、子供が川の近くで遊んでいる様子、船の上での作業、船で運んでいる野菜や果物を買っている様子、建設中の住居の構造などを観察することができ、改めて村の生活の一端を知ることができた。

水が床近くまで上昇している期間は半年ぐらいなのであろうか。その時は涼しい環境が形成され川を利用した往来も楽にできる。しかし残りの半年は、このような水面から離れた住居での生活となる。長い梯子を伝って住居と水面とを往復することになり決して便利とは言えない。また床の高さが地上から 8 m もあれば床下に日陰はできず、そこでの涼しい生活はできない。そもそもなぜこのような住居がこの場所に成立してきたのであろうか。この点に関しては塚脇教授もわからないということであるが、成立の経緯を明らかにすることは興味深く、研究の課題ともなるであろう。

川の水位の上昇はトレンサップ湖への水の流入によるものであるという。流入する水はメコン川から流れてくるが、メコン川の上流のラオスではダムが建設されており、それが完

成すれば水の流入が制限される可能性が極めて高い。従って川の水位も上昇しなくなる可能性が出てくる。勿論トレンサップ湖とその周辺環境の生態系に極めて大きな影響がでてくる。この村にとってダム建設による水位の低下は死活問題である。以上は塚脇先生から得た情報である。

コンポンプルック村では高床式住居の室内を見る機会があった。床は竹で作られ床下が覗けるくらいの間隔が開けられて構成されている。場所によってはその上に絨毯が敷かれている。床に乗ると体重で少し撓むこともあり、初めて体験する者にとっては床が落ちないかという不安にも駆られる。天井や壁はトタン板でできており、日射があるときはトタンが熱せられて、そこからの強い輻射が室内の居住者に当たる。実際に輻射カメラで測定すると室内温度 30℃ぐらいのときに表面温度は 50℃にも達している。通風は床の隙間や入口の開口から十分に得られるが、輻射の影響は大きい。日中に室内でも涼しく過ごすためには、天井の空間に輻射を避ける簡易な板やフィルムを設置することが適切ではないかと感じた。雨水は有効に利用されているようあり屋根からの雨水を貯水槽に流す工夫が各住宅で設けられていた。

一方、川のそばの平地にも高床式の住居が建設されていたが、同じ場所には殆ど地面に接して作られた建物が無秩序に置かれていた。高床式住居に比べると室内空間は狭く質も落ちるが、これらの住居は川の水位が上昇して水が地面に侵入してくる際には、建物自体を水の来ない高台に移動するとのことであった。その平地にはゴミが散乱しており衛生的にはかなり問題があるような印象であった。

(3) チョンクネア村の水上住居

過去にオランダで水上住宅を見たことがある。その時は、普通の住宅が川の上に載っているという感じで特段の印象はなかった。今回視察した水上住宅は船のイメージが強く、開放的で内部が覗け、服を着替えているところや、川が交通のために利用され、物資を運び、売り買いする様子も見られた。

水上住居のメリットは言うまでもなく水面を流れる冷やされた空気により涼しい環境が得られることであろう。ただしトイレも船の上に設けられ垂れ流しになっているようであり川の汚染が懸念される。

水位が低くなってきたときには湖の方に移動するとのことであった。また、ベトナム人が多く暮らしているとのことであったが、その経緯について興味がわいた。

4. インターンシップの学生との交流

2日間の交流であったが、インターンシップがどのように実施されているのかについて概要を理解することができた。インターンシップの課題としては、人口過剰に悩む世界遺産区域から新しい村への移住状態の管理や、遺跡の周囲の水環境の管理など、とのことである。

アンコール世界遺産関係の国立公団 APSARA で、学生たちが受け入れ側のスタッフとやり取りをしている様子を見る機会があったが、その真剣なまなざしや英語での情報交換の

状況を見て立派に仕事をこなしている姿に感心した。制服の着用は素晴らしいアイデアである。外に向けては集団で何らかの活動をしていることを示すことができるし、学生たちにとっては自分たちの役割を自覚する上でも重要である。

筆者はこれまで東北大学を中心に色々な学生と付き合ってきたが、参加した学生は大変活発で積極的な印象を受けた。積極的過ぎてハラハラする場面もあった。特にトレンサップ湖の観測地点に行ったときに、観測用の梯子に上って写真のポーズをとったり、レストランで蛇を首に巻いたりして楽しんでいたりしたときである。

2日目の夕方には孤児院へ訪問するというので同行させていただいた。この時も貴重な体験をした。孤児院への訪問は勿論初めてであり、どのようなことが展開されるのか興味があった。参加した学生たちは前年に訪問した先輩たちの経験を踏まえていたようで、様々な遊び道具を用意しており、互いの自己紹介の後に、風船、折り紙、ジグソーパズル、フリスビー、バトミントン、シャボン玉、縄跳びなどで楽しく子供たちとの遊びに興じており、孤児たちも本当に楽しそうであった。

孤児院の院長の話によれば、孤児院は30年前に開設、収容人数は最大で60人であったが、現在は18人、最長年が23歳であること、寄付をもとに二人で世話をしているが、問題は資金不足、人手不足とのことである。訪問する前は悲惨な過去を持つカンボジアの暗いイメージがあったが、元気に遊びに興じている子供たちを見て、そのイメージは払拭された。

今回のように世界遺産であるアンコール遺跡群の保存という大きな仕事の一環に参加し、現地の人々と英語で情報交換を行い、グループで共同作業を実施するというインターンシップは、参加する学生にとってはまたとない貴重な経験である。海外におけるインターンシップは安全確保や費用負担の面から実施を躊躇してしまう傾向がある。今回のインターンシップの実施に当たっては周到な準備があったようで、受け入れ先との信頼関係が形成されていること、現地の社会的、文化的、環境的な事情に詳しいことなどがあって初めてできることであろう。このようなインターンシップを企画し実行されたことに対して心から敬意を表したいと思う。

5. その他の印象に残ったこと

塚脇先生からの話などから、その他の印象に残ったことを以下に列挙する。

(1) トンレサップ湖の水位の移動と生態系の維持

メコン川からの水の流入により雨季はトンレサップ湖の水位が上昇し乾季は下降する。その移動の幅は10mにも達するとのことである。それによって湖の周囲の森林は水につきり浸水林となる。浸水林の種類は約8種類で、120種の植物が育っている。そこから栄養分が湖に流れだしプランクトンが発生し湖では世界一、種類の豊富な魚が生息するということである。

(2) 観光化による環境破壊

観光旅行者数の急激な増加によって様々な環境破壊が懸念されている。給水の確保、排水

処理，廃棄物処理，歴史的建造物の劣化防止などが課題とのことである。また，外国資本が許可なく入ってきており，それによる環境破壊も大きな問題となっている。

これらのことは，現地の状況を観察することによって初めて実感できたことである。

6. おわりに

この度は，金沢大学のインターンシップに合わせて伝統住居の視察の参加させていただき，学生との交流を含めて貴重な体験をさせていただきました。この機会を与えていただいて塚脇真二先生，二日間共に行動し気を使っていた埼玉大学准教授荒木祐二先生，滋賀県立大学准教授堂満華子先生，小松短期大学准教授木村誠先生，並びに金沢大学，埼玉大学，小松短期大学，滋賀県立大学の学生の皆さんに心から感謝する次第です。

9. 資料

2015年度アンコール遺跡整備公団インターンシップの概要

1. 参加者

(1) インターンシップ学生（金沢大学・小松短期大学）

- 瀬戸 利之（金沢大学人間社会学域国際学類 米英コース2年，グループ1）
加納 望音（金沢大学理工学域環境デザイン学類 都市デザインコース3年，グループ1）
野村 結（金沢大学人間社会学域国際学類 国際社会コース4年，グループ1）
盛田 佳歩（金沢大学人間社会学域国際学類 米英コース2年，グループ2）
若宮 野乃花（金沢大学人間社会学域国際学類日本・日本語教育コース2年，グループ2）
中山 雪枝（金沢大学人間社会学域国際学類 ヨーロッパコース3年，グループ2）
辻野 成瑠（小松短期大学地域創造学科 ICT&ビジネスステージ1年，グループ3）
磯部 朝日（金沢大学理工学域物質化学類 応用化学コース3年，グループ3）
牧田 啓成（小松短期大学地域創造学科 ICT&ビジネスステージ1年，グループ4）
神谷 卓磨（金沢大学人間社会学域経済学類2年，グループ4）

(2) チューター

- 河本 麻実（金沢大学理工学域環境デザイン学類 都市デザインコース4年）
長谷川 美華（金沢大学人間社会学域国際学類 国際社会コース4年）

(3) 連絡教員

- 塚脇 真二（金沢大学環日本海域環境研究センター・教授，8月21日～9月9日）
木村 誠（小松短期大学地域創造学科・准教授，8月23日～9月6日）

(4) 埼玉大学

- 荒木 祐二（教育学部 技術教育講座・准教授，8月29日～9月11日）
山村 瑞穂（教育学部 教科教育コース技術専修3年，8月29日～9月4日）
山内 悠（教育学部 教科教育コース技術専修2年，8月29日～9月4日）
山崎 郁実（教育学部 教科教育コース技術専修2年，8月29日～9月4日）
高井 恵（金沢大学人間社会学域国際学類4年，8月29日～9月5日）※特別参加

(5) 滋賀県立大学

- 堂満 華子（環境科学部環境生態学科・准教授，8月29日～9月4日）
浅井 裕里（環境科学部環境生態学科4年，8月29日～9月2日）
大崎 亜見（環境科学部環境生態学科4年，8月29日～9月4日）

2. カンボジア側受入機関/責任者

カンボジア国立アンコール遺跡整備公団（Authority for Protection and Management of Angkor and the Region of Siem Reap, Kingdom of Cambodia）/ Hang Peou 副総裁
兼水管理部門長・金沢大学環日本海域環境研究センター客員教授

3. 各グループの担当業務

- グループ1：ルン・タ・エク エコビレッジの整備事業
- グループ2：西バライ貯水池の環境保全・観光整備事業
- グループ3：北バライ貯水池の環境保全・観光整備事業
- グループ4：アンコール世界遺産公園洪水対策事業

4. 全体日程（2015～2016年）

- 3月17日（火）：アンコール遺跡整備公団と打合せ（シェムリアプ）
- 4月3日（金）：インターンシップ説明会（金沢大学人間社会学域国際学類生対象）
- 4月10日（金）：インターンシップ説明会（金沢大学全学生対象）
- 4月17日（金）：インターンシップ参加者の募集開始（金沢大学）
- 4月23日（木）：第1回実施委員会（金沢大学：実施概要の確認）
- 5月19日（火）：インターンシップ参加申し込み〆切（金沢大学）
- 5月19日（火）：インターンシップ説明会と募集開始（小松短期大学）
- 5月26日（火）：第2回実施委員会（金沢大学：参加学生の選考会）
- 5月27日（水）：選考結果を応募学生へ通知（金沢大学）
- 6月4日（木）：アンコール遺跡整備公団と打合せ（シェムリアプ）
- 6月17日（水）：第1回インターンシップ事前説明会（金沢大学）
- 6月29日（月）：インターンシップ参加申し込み〆切と結果の通知（小松短期大学）
- 7月21日（火）：インターンシップ事前説明会（小松短期大学）
- 7月22日（水）：第2回インターンシップ事前説明会（金沢大学）
- 8月6日（木）：第3回インターンシップ事前説明会・交流会（両大学合同）
- 8月22日（土）：アンコール遺跡整備公団との最終打合せ（シェムリアプ）
- 8月23日（日）～9月6日（日）：インターンシップ実施期間（※委細は別記）
- 10月20日（火）：インターンシップ報告会（小松短期大学）
- 10月21日（水）：インターンシップ報告会（金沢大学）
- 11月20日（金）：インターンシップ報告会（金沢大学人間社会学域国際学類）
- 2月26日（金）：インターンシップ報告書の出版

5. 渡航日程と現地での活動（2015年）

○往路

- 小松短期大学：8月22日（土）小松－JR→関西空港（ホテル泊）、8月23日（日）関西空港－VN321→ホーチミン空港－VN3821→シェムリアプ
- 金沢大学：8月23日（日）金沢－マイクロバス→富山空港－OZ127→仁川空港－OZ737→シェムリアプ

○現地での活動

- 8月24日(月): アンコール遺跡世界遺産公園の見学, 滞在準備など(午前), インターンシップ始業式・グループごとに業務担当者との打合せ(午後)
- 8月25日(火)～8月28日(金): インターンシップの業務に従事
- 8月29日(土): バンテアイスレイ遺跡等見学(午前), 自由行動(午後), ※埼玉大学・滋賀県立大学グループ到着(夕方)
- 8月30日(日): トンレサップ湖見学(午前), 自由行動(午後)
- 8月31日(月)～9月3日(木): インターンシップの業務に従事
- 9月4日(金): インターンシップの業務に従事(午前), Hang Peou 副総裁との面談(午後), ※埼玉大学・滋賀県立大学グループ帰国
- 9月5日(土): 公団職員とのバーベキューパーティ, 出発まで自由行動

○復 路

- 金沢大学: 9月5日(土) シェムリアプーOZ738(機内泊)→仁川空港(9月6日朝着)
ーOZ112→富山空港ーJR など→金沢
- 小松短期大学: 9月5日(土) シェムリアプーVN814→ホーチミン空港ーVN320(機内泊)→関西空港(9月6日朝着)ーJR→小松

※VN: ベトナム航空

※OZ: アシアナ航空

塚脇真二

2015 年度アンコール遺跡整備公団インターンシップ報告書

2015 年度アンコール遺跡整備公団インターンシップ実施委員会

加藤和夫（人間社会学域国際学類 教授・学類長）

清水邦彦（人間社会学域国際学類 准教授）

辻谷友紀（学生部学務課教務係 主任）

塚脇真二（環日本海域環境研究センター 教授）

| | |
|-----------------|---|
| 発行所 | 金沢大学人間社会学域国際学類 金沢大学環日本海域環境研究センター 〒920-1192 石川県金沢市角間町 TEL (076) 264-5455 FAX (076) 264-5468 |
| 印刷 発行 印刷所 | 2016 年 2 月 25 日 2016 年 2 月 26 日 前田印刷株式会社 〒924-0004 石川県白山市旭丘 2-16 TEL (076) 274-2225 FAX (076) 274-5223 |

